

戊辰漫錄

昭和三年四月下旬起筆

特別
14
1919
403



戊辰漫録

昭和三年四月下浣起筆

一 昭和三年戊辰の干支、南に六十年
 既往、明治元年、今月の江戸開城の月
 である、此雜筆と戊辰漫録と四考するに
 紀念の意と當り也
 日、開成中、臨時議會を、松と二大
 政黨、執事伯仲の間にあり、雄雌を決す
 るも目前にあり、而も風か、こゝも戊辰と
 之れ年の一現象也
 政府の議會、先づ共產黨を征伐し



(第五編 第六) 八 世 十 九

今、この亦戊辰の一現象なるを以て
本年亦御即位の大典あり、故に改修
費を決す、兎角戊辰の年、二重
大子あり、

其の北の記録に記すことも甚く多
く、
四月廿七日記

○先の編志きんもりの出来事也、本日老の師
印刷會社臨時株主総会をひらき、信託
増資即ち百萬圓の株券募集を為す
決す、余が此令社下社長となりて増資をな
すこと二回、今も五十年前五十萬圓を増

資し、今百萬圓の増資を決し、亦戊辰
を記念するに、よきを得べし、之を決り、
又就て、前月百株以上の株主を召集し、内
議す、所あり、増資の目的、自高速度輪轉
機二台、他機械を増設し、大量出版の氣
運、應せんとす、の外、若干の負債を償却
充とする、なり、今日の総会、満場一致を以て
之んを可決す、

○本年六月を以て、文の協會創立二十周年に際し、
すもを以て、戊辰會を記念し、今計畫中なり、
六十年前の戊辰を勵みて、本年の戊辰と比較
し、更なる進歩を望み、且つ望みを繋ぐ

るも意義あることあり、戊辰の回顧もさうさう
ていへば味あることありある。徳川末叙を以てし
明治初期の過渡期である般の重大事件であるも
えと多入るが、いかに然るも友人と果て多く
物語し、今呼ばれて今の人こそよきといふが、赤三の
戊辰七味舌と云ふ丸やう、吾等いかに友人と
演説をいふき、或は演説会をいふき、或は
回古を出版して、吾等の二十年記念と云ふと
する也

今の式日に欲へべき冊子と云ふこと、宅平沢
外一二の論説の、戊辰の年表を載
する也



編纂者の大意を口授する、折敷執
筆の事

講演会より吉野佐多、石里忠直、外二人
の出演をいふ事

○留客日記の故、中東洋梓氏の日記を
宜し、只の手記に係る、同日校友石川厚三村
山秋浦に托し、余を去るんといふ、任かせ余
二万山を興つて、今うの買方、此日記の、
二年の起りの、次十八年、皇統の、
二巻を、後、の、首巻の、初部、荒干紙、

名交りの文あるもの故に皆傳文也。此日誌改
道し上のより大隈を居るより東京寺のより校の
こと并に余希に友人のより就てある文海
あり。此の家は花も心板も他人の事な委無
す可らざるものより。や即君致して後傳を心
えとして之れを傳り受けしことあり。事海を
及即も友人の其後年を死に即も縁を
ある。中山居るまは日記のや即家の存
せずといふとまさき不著ると思ひありしは
今現るん出たり。石川の父の世高といふは
るにや即君生るなり。頻りに継来しは後
からしや即君の傳ふといふ。淳三の淡るんは家



ハ委曲を知り能はず。孰んうして七他人の事な
入らざる。ハ幸と云ふて可也。此の記中より
余は関する。江も少かしく。一後氣懐かし
感す。まらさ能はる也。他日早稲田大
学の納めるとも。余の存世中の家と花と
あるん。日誌のの。東洋雜誌一冊あり
論稿を一冊あり。このより也。家花と
一冊あり。その内容同じか。余の
七珠重す。四月廿二日誌。
○去廿日夜汽車より早大四五の同人と香川好
方相と赴く。翌日宇野に。乗船午後四時
高松に着。着後、高松の余の詩の四巻の

と移してあしがらの郷さう、こゝに別する、今方三回
 目、前年行きつ返り比まん、面目を改むるの
 少くも、築港の成りたる一より、舟道の出来たるの
 亦一也、玉藻城内より、杉平向の邸宅成りたる、栗林
 公園の往き成りたる、日市中の杉平邸が、度々と改
 政の起りたる、前田向したる、可祝旅館が、居を
 移して、新築せられたる、皆余の、目新らしく、先
 づ、香川村の風景、大抵一覽をせられたる、い
 と、津田の松、元夜、たる、こゝに、杉平家
 の別業、少くも、をまん、まん、松、元夜、一遊を
 歴する、今、回、愉快を感する、一事、と、さす、
 再折柄、大典を、記念する、再、業、持、折、柄、つ、あ



リ、公園の、美術、展覧、会、も、あつて、一日、の、休、む、を、お、け、し、る、も、由、任、を、お、め、た、る

北行念心の様子を擧記するが

- 一 杉平家の款待の例のこと、一行届きたる
- 一 関西校友会への感入をさうすること
- 一 旅館の面目を一新し、めたること
- 一 舊友の北地、少からずあること
- 一 公園、并、津田の跡を、探つたること
- 一 象谷、古、理、平、寺の名心を一覽し、たること
- 一 平賀、深、内、の、心、を、味、ひ、たる、こと

一 鞠と酒の口はあひしこと

一 牡丹の花の豊高なること

由余有都と主之の二日清在と又その新縁をたてし
一日伊勢長と飲み一日おまきと飲む、おまきの刻
直例もも可なり、固き道楽の代りも七かき
山本正春をを記の短冊を逸る、ちよりの傳へ
のしものを標ちよと、嬉み入る、清み寺附の
骨董店を記を四五の玩具を嬉み、いぶ
ハ清在中の一快とす

Table with multiple columns and rows of faint text, likely a list or index. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.

Blank lined page with vertical blue lines.

早稲田大學新聞西遊文大會出張券各紙

東京	大阪	京都	神戶	名古屋	福岡	仙台	札幌	旭川	釧路	帯広	青森	岩手	秋田	山形	宮城	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京
第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	第十一	第十二	第十三	第十四	第十五	第十六	第十七	第十八	第十九	第二十	第二十一	第二十二	第二十三

由(通)部と主(主)の二日清(在)と冬(不)の新(縁)を(あ)る

一 鞠と酒の口(あ)る(ひ)しこと

一 牡丹の花の(豊)富(あ)る(こ)と

名匠春色雨餅甜菊樹山
 梅午新香美ら飛鶴餅
 花変又泥崖之望遠嵐

成唐吹雪游飛馬山

海安齋



石安齋

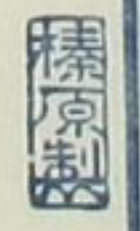
○漢改、故武蔵野抄、漢改在所歌集を贈
 多、赤松の常福といふ人の著にして、利を著る歌
 へ、おのゝ漢改、関する和歌を、若集の
 從末全撰より、他、漢改の歌を、七出し、
 一、あまの他、物、の、属、する、ものを、訂、正、し、考、を、
 の、事、に、及、び、正、者、也、有、考、を、由、途、に、從、り、乘
 して、翻、漢、し、む、所、三、二、止、す、り、左、に、大、略、を
 挙、ぐ

一 漢田松原ハ一名琴平といふ、津四所左端より、
 田村西端に、母橋あり、松平家の別荘のあり所
 ハ、松平村あり、此以、田城、方、徳、傳、開、直、徳
 傳、朝、一、草、す

一 神懸の伏所のぬら滑乾ハテ危峯崎壁
の岩骨立まろくむの石奇跡多、紅葉の
平まろ山骨の露のん時と優ること多
之れを寒窓漢と名く、高ち平元素奇
峰絶壁の地と大漢海無き地と

一 栗林公園 昔国陽の栗柑ありて栗の赤林と
いれ、因つて栗林の名あり、山かく徑ありし
るの北門(是正川)より山に裏門といふ、誤
を入り南へ奥深く入るべく作り、北園の
表近東海(五十三)驛よりと、ふい
ろ

一 三霞洞の後歌部美合村あり、此地僻素



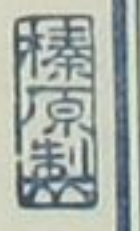
高電鐵湖を、河濱自動車合社の設
立より、高橋より二時間、二重橋より
湖中自然の風景を味ふ所、こゝを推
奨す

一 西郷と此に流海に接し、月照忍向が
濱に出身であること、如女と知つた、
度部吉原村の生ん牛額寺に住すと
あり、東信海七流濱出身であること、
いふこと、

一 今が津田の地、余(中)如女志原を
いふこと、平賀海内の田里、うら、其家

北極に居る由をも訪ふの道よりし
こゝろ志度焼といふ由を出づ、涼内の志
ハ交趾風といふ志方焼と相関せよかぬ

一 有るる蓋屋屋金の産地を全後中
志度浦真川 古曰蓋屋屋有鑄物の
良工なりとありて三代物神も曰し物
記せしと云、筑前遠賀郡蓋屋屋の産
場といふ此著者の考証とす
一 琴平山も象頭山といふ昔村の三日月
や牙磨出する象頭山といふ此山より
松の名工玉椿為共か象谷と考て



勤王家日柳並石が春象徳と稱せし
七北山に取らる也

淡
白政三三白の石産あり、曰く米曰く塩曰く三金皆
白色なり、三金ハ白砂糖も海産を殊に
佳とし、唐屋の葉あしハ尤も唐紙を海産
に求めたりとす

○直言を許す人の強い人である。
○人間が有つてゐる能力は無限と云へ得るが自己
の経験と知識が常に邪魔をせしむる故の致元
長を辞退する

○輸入起息に必ずしも非ざる、何れ故に外國
を去る人、愚思想の輸入を起息する、困

つれよあは

○此の輸入超過を防止する法は偏くは教育にある
、改権の鎮座ハ無効である。抑々
刺激して之を助長する。

○外田の流行の思想を鶴呑うして日本を行ん
とするハ其人切禱するが故也。保し○抑々其の思
想を鶴呑うし之を行んとする人々も更々
切禱する人多敷を占める世の中ハ其の傳播
力ハ恐るべき可なり。

○恐るべき隣家を持つるは困つたことハ、西田ハ
我克格帝以来敬言戒を怠らざる所也。
保し開つて見れば、果外ハあつたか、今亦も恐



思想制を遂所とありて、赤恐ふべき隣家とあり
也。勿論世界列國を取つて去るは恐怖の因とせん
也。日本が打勝つるやんと思ふ所も亦
列國の恐るるやんぬやうなる所也。思ふに無形
ごとく此も傳播する。保し日本は其の隣國也あ
る。

○法廷選挙後の臨時議令に對する政府の醜態ハ
言つて思ひてもよかある。切り抜が出来ぬといふと二
回また停令を奏請するといふ真に沙汰の限らな
ある。政府の内情解散を欲するも、其の意欲せ
ざる為め解散の卒に出ること出来ず、鈴木
内相の辭職も、内閣を改選し一時を糊塗

さうして外をきいて形勢をいささか其の毒をうへ一連
託生を托せし且つ之れを公言して政府内相の職務
より自かく生んとするハ憲政道徳の許す所な
らば内相ハ政府の中樞なり其のさうしてことハ即ち
政府のありしことなり其の内相に對する非難ハ政府
に對する非難なり、部分原効といふも藉口して
内相を差控へて活んとするハ餘り醜陋なり、
立憲流下の内閣ハランがニホムてあつて一蓮託生
ハ通則にありの如く一閣員を差控へて生くべしと
するハ一角の崩さハ全部の崩すハ前提と知ら
ずかや

政府ハ今もたも尚ほ切り板を夢見つてあり内相原



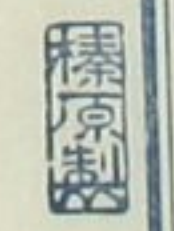
効を事定むる谷んて中立堂を緩和し之れ他り中立
堂と共に堂を引入れんと案しつゝあるは擡ふ可らず
今後中立堂の去就ハ連帶トし難きも民改選
の全閣原効の案ハ後分ハ提出あり、若し此案
通過せば政府ハ辭職の外なきべし或ハ解
散を敢てせんか何んぞや中立堂を引入れ得ず
んば内相を罷めざるが政府の大損失也あらば
るゝぬ。

内相引責ハ其形式の如くは物なり原効を政府が認め
らるゝある。之れを認めざる以上ハ政府ハ総辭職を
行はざるべし其の事ハ出さるゝ内相切
板け又没効するの醜態ハ益々國民の信を失ふ

所以又ある也。設令僅々頸數の差を以て切り解
け得たりとすも、通常激令と大なる見とす。日
幕の主難き、前途七十年の如けん、断末を
潔くせざるは、國民の信に長く去つて、再起不能と
することを思はざる可からず。激令の再停令を見
て所懐を察すといふ。

五月二日

○考し地中海に珊瑚の佳品を産し此日本に所産
る古海として著るふよありある。其の特徵は毛
彩が淡やふとあるのみならず、心素も同じ色が通つ
てある。日本の土産をとりて、外部へ多くとも心素
通つてある。此の地中海の産は地産のたりの
今、取らんるくると、今日世界は多産と云われぬ



このは、本州原崎であつて、まんが七八分通り原
産の多く、伊太利と支那と輸出する。まんが加二
七と七と重なる、ゆびある。何れも日本で加工せさる
か、兎角日本個材をことを閑却して見す、利
益を奪ひ、ハ貴城がある。

古銅印

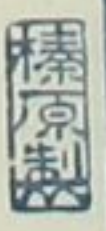
刑部

鈕 重子

侍郎



此印は京都散策中、清見の骨董舖
に獲り、鈕は彫る時代なりと長ふべし
此は上座の美術協會に印人の作る辰造の
あり家の印二十七顆、先年あるとて坊
出の余未行して見ず、此の二十七顆中、
吳大澂の印二顆あり、故人の印も幾
つあるも、刻者不明なり。今方の所
の刻は、足立時打之んを以て、此印も
自刻の印に係ると、
如く刻者不明なり、刻者も不明なり、
人味を存する所を保て考へ、大澂自刻
とうり、このことを得し、大澂の刻印



日本に傳る所、此の所、此の所、此の所、
五月四日録

○少数堂の如何なる所なるか、
凡が海軍の柄を握る所、大政堂、
時、此の所、此の所、此の所、
今、此の所、此の所、此の所、
少教堂、臨城、大政堂、
政堂と離れ、大政堂、
ツム、曲りの所、
るを以て、此の所、
るを以て、此の所、

であつて、善悪の区別がある。二大党の兎に角
國民多数の意思を代表するといふのである。カステ
ニジウオートと多数を委するの危険の事である。
憲法の常道に於ては、^此力選挙干渉を死
次の誤會に於て少数を委する^此力選挙干渉を死
と^此力から、其安否の^此力選挙干渉を死
職を由義多しし^此力選挙干渉を死
が^此力選挙干渉を死
あつて、^此力選挙干渉を死
よの^此力選挙干渉を死
近く、^此力選挙干渉を死
どの男が平生^此力選挙干渉を死

を強効し^此力選挙干渉を死
とき、^此力選挙干渉を死
快か^此力選挙干渉を死
と^此力選挙干渉を死
内^此力選挙干渉を死
言^此力選挙干渉を死
教^此力選挙干渉を死
の^此力選挙干渉を死
七^此力選挙干渉を死

選挙の期を一日を剩すのみ、依託の不行
ある上程し、その名も今日の決定を来るとして
志せしむ、敵味方を解散をせしむ、^此力選挙干渉を死

第七十七回書及篆刻展覽會參考品目錄

財團 法人 日本美術協會

御物

一和歌殘缺傳記貫之	一	幅	帝室博物館	一清鄧定白 石印	市嶋春城君
一明張瑞圖書 行書七言二句	一	幅	東京美術學校	一清吳大澂 御史中丞吳石印	二個
一明陸應陽書 海上望秦駐僑筆作	一	幅	侯爵山内豊景君	一清徐三庚 晉康樂侯裔石印	二個
一唐史維則大智禪師碑	一	幅	幡生彈次郎殿	一清徐三庚 長州謝榛日利石印 蘭東四十歲後書	二個
一僧一休書	一	幅	田崎長國君	一清陳曼生 無邊風月 揮毫落紙如雲烟石印	二個
一佐久間象山書	一	幅	松岡洋太君	一高芙蓉 竹吟石印 西澗釣叟石印	二個
一明傳山指頭畫 墨竹	一	幅	雙幅	一大雅堂 家傍青山竹徑開石印 疎影暗香萬物一黑	三個
一清諸昇墨竹卷	一	卷	雙幅	一林谷 玉禪石印	一個
一清渾南田柏	一	幅	松岡洋太君	一一道八 耕雲山人陶印	一個
一清法若真 七絕	一	幅	田崎長國君	一木 風月相知磁印	一個
一清王石谷 雪景山水	一	幅	田崎長國君	一狩谷掖齋遺印 掖齋藏書石印	一個
一清殘道者 山水	一	幅	田崎長國君	一明文三橋印譜	一帙
一明夏仲昭 墨竹	一	幅	田崎長國君	一定武蘭亭四種	一冊
一明八大山人 山水	一	幅	田崎長國君	一爭座位帖	一冊
一清宣重光 植木孤亭	一	幅	田崎長國君	一成通經幢拓本	一冊
一清高鳳翰 牛亭對菊	一	幅	田崎長國君	一千蔭手本	一冊
一清高鳳翰 蘆雁	一	幅	田崎長國君	一傳弘法大師書 陽寺心經	一卷
一清吳窓齋篆文楹聯	一	雙幅	松岡洋太君	一僧良寬書	一卷
一清石濤 畫帖	一	帖	松岡洋太君	一奧原晴湖 月瀨長卷	一卷
一清查培 墨竹	一	幅	松岡洋太君	一明董其昌小楷孝經	一冊
一清方少師 雲景山水	一	幅	松岡洋太君	一日高 山水	一幅
一清李復堂 花卉	一	幅	松岡洋太君	一同 蘭菊	一幅
一清邵村 山水	一	幅	松岡洋太君	一日高 扇面帖	一幅
一清董二樹 墨梅	一	幅	松岡洋太君	一同 山水	一幅
一清富翁 畫	一	幅	松岡洋太君	一東久世伯 赤壁賦畫贊	一幅
一清富翁 破荷	一	幅	松岡洋太君	一傳弘法大師書 陷寺心經大字	一幅
一清史彌翁 山水	一	幅	松岡洋太君		
一明高耿甫過庭書 譜臨書	一	幅	庄司銀四郎君		

この印の家持のよみませ

○上巻二冊を由き美術協会
の陳列を見る。現代人の手及多数の千回點に筆



百の事を云ふ、佐藤春帆の故を記す。石橋
ハ親を以て多量に傲ハシあるを欲せしが、
其部分を刪去せよと、春帆其の刪可とせ
るもいつて後を心み、母を以て石橋ハ大才人を以
つてつとむ、其の小作の意にあらし時山陽
を敬むかし、其の通ず世に喧傳す、梅屋の
あるを云ふも亦父の如し、其父の傲を以て傲
ハシめんとし、たゞちなるも其の如く、子を
見る親も荒れおとす、此地著、此の爲
め、一なるものなるか、史家の志を以て、
其の若くハ凡教に聞するものなり、石橋の
才とち、一なるものなる也、此方の珠

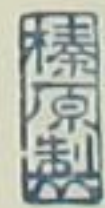


とす、其のハ冊記、石橋の自著、係、石橋の
昔の梅屋の書、酷似す、序を以つて、
ハ、梅屋の阿某院通詞被仰付、
製表鐵所勤務の時、此く、
自著の年譜をある、
ある四年、八月とあり、石橋ハ、
名と、
三田、
中、石橋ハ、
爰に附す

贈、
情、
天

涯、物深、地、何、復、蘇、錐
刺股時
石橋寺

○神田の五虎を漁り因果の事と云ふ刊本
を贈るに由り、此者佛友の因果を説き
るアチウドートマン、原若者が獨逸人
カウカある。原者ハカルマと題しドクトル
ルケラスの著る。此者の初め廿二出
イニ依る。露液と及譯せん、為り
トルストウの著る。誤認せしむる
佛友の名の科等の事と唱道すし、
蘇錐と并記を生し、ドレストン兵
校の教



職を辭せざるを得ざるあり。此者
：彩色の物画を挿入す、葉名の
と名月耕の画にありし、譯者ハ鈴木大拙
宗演校閱す。今次三十一年の發行也
ハ部数小なりと云ふ、此者と坊間
ハ初め也

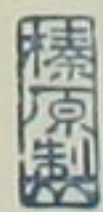
五月十一日録

○同日、先田五伍の徳川以
つた、贈ふ。初版ハ上下二卷
年九月、發行せしむる。各
洗葉の彩色は、此書ハ若
ハ私家の食ふをいみ、
生都屋と云ふ、自家上家

一部ありしものあり、是利南時ある部分も
漢人か精讀ししことハその時、明末老翁
又漢人びある著者の史眼の卓然、今更なる
が本書のことキ、愛蔵心こほつるものを見れば、
を林あり得る、愛蔵が多し、文章七箇筋、
愛蔵に値する。

五月十二日誌

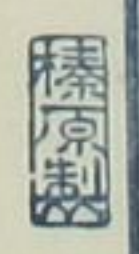
○前年田中 ち山伯を早大に寄贈され、初
唐宮本玉篋一巻の末歴、就レハかつて録
す所が、あつたか、文化三年伊波、蘭軒の記
に據り、こゝが只、京都の、お、銭屋宗兵衛の
高、あつたこと、知らぬ。錢屋宗兵衛ハ二三
往著述もあつた、お、あ、の、文、字、七、あ、つ、且、つ、ぬ



書家もいろいろ珍しく、いよを、花、れ、其、間
係から、致味家の上流する、よ、あ、つ、尋、ね、行、き、
珍名、関、説、を、精、め、れ、き、き、き、き、き、き、き、き、
つ、其、一、人、び、あ、つ、た、著、者、の、記、を、據、り、し、巻、尾
の、裏、に、書、か、れ、た、讀、後、を、言、つ、た、止、ま、り、格
別の、説、も、附、け、て、あ、つ、た、が、實、に、末、尾、に、讀、後、の
あ、つ、た、こと、の、自、人、も、今、も、氣、附、き、ま、り、た、館、員
の、大、石、の、珍、る、所、に、因、り、し、康、平、の、年、報、に、あ
り、大、石、の、某、傳、の、署、名、も、あ、つ、た、が、其、の、説、
の、裏、に、一、枚、の、白、紙、が、貼、ら、れ、て、あ、つ、た、辛
酉、の、透、し、文、表、を、解、し、得、る、と、云、つ、た、お、れ、の、
其、書、し、を、徵、す、る、筈、に、か、免、し、し、康、平、と

云ハ源頼義の時代ハあるから北河修七ある
2在々いよほど一旦後居りあるハ此經歷ハ今も
昔も軒のち留し揃り初めし礼り得たことである
(五月十二日記)

の自分い嘗てお百態をちいれことがある、いんハ余の
随筆に収めてある、保し迄薬とせいのあて薬ハ
及ハるうらな。全体人間の體ハおび出来てあるやう
あるよ、茂全ハ全部ひらうとも大なる不安がある
ことといふまじもろい、勿論津流、延、涙、汗、お
ひある。いんお坐を補ひハおを以つてぬハ
ぬ人間の病患を救ふことハおが重なる。廢
劑ハおまらぬハお乃ち^代たを夜し若くハ



冷たもあひまう、枯朽を潤すことハいんである。迄
の原始時代薬劑身ハ風とえとらし時ハお
少くはらう迄廢劑とせしおあうしハ今日
薬劑のあき達しし時ハおをす、尚ほお
を辨ることの甚だしいことを考へんハ思
ハるこころよかあるう。唯ハおも時ハおを考
すことある、病忘ことハ用ありさうともある
殊日調量とらう或ハ切を養し或ハ客を考す
ことのあるハいんもろし、昔ハお子ハお
と論してあおんはらう○とらう、終ハ
と東江流の平樞ハおをらう○とらう、
其の得失の辨別、調節ハ係ること論を要せ

珠と珍とくく元へは、白毛透明のせり口
イトやうのよを踏つたよふ二ヶ所あり、おを
考き上るこんを踏つた外と見え左にうく
透明物の上を書ききつて思ひやう
此のちの綴し方、列條とどうもなる、綴し目
の二印位を用ひず、表紙の折目、糊を貼付
し、表紙の左端は表裏表紙、細く堅き
心を杜せしめて凸起せしむ、表紙の上の一云
近也、此も早く二集送し、小町集の端片す
若見々えおといふ此の複製は田中親美
長き片口を經て漸やく完成し、七部の一
とす。



經書七數卷示せん中、以大聖武一卷こと
又直を元へたり、寛文十一年の江戸大地震
ハ五折りも大形也各冊、最初の代紙も添
へあつて目出たり、寛永版と推定して得
べき、江戸田の帯つて屋代紙に模刻せ
ぬしことあるも、まゝ原をとりしからず、往々
欠陥を認め、お田の帯を完全する、次期、
複製をせしむることと決す

此序、林若村の持卷し、若平、珍書の
内や、珍しく感する、左の如し

新文字傳へくし
江戸名物を人お化し、その人物

を日録名文字の條にて作りなす
也中々志軒(道)か陽基を叩いて
詩料の回七ありの和吹り版と見
しや

一 一の市市眼

一九の福をそ人物の画す

一 本加古川をそ紀目
馬琴の稿本

一 上館集



加保茶元成の歌集をそ刻
本也

一 子寶子供ねひ

亨保此の版也

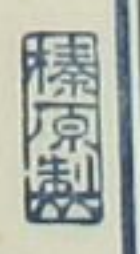
一 柿無益毒記

柿を茶化しするものも佐哉
の麦りたる黄表紙より志
川春舟の著るを西も自
書しるゝと遺稿先生
持枕とせし記す稀教の

書とせしむ。枕村夢二士代心
 一の陰もを尊叔料
 としなるもの也

山林携帯をの内

幅一丁二分堅ニ寸五分許の丸版
 二摺りなりと受しきものを数る故
 販り込みなるものあり。えんを替りし
 乞食が銭を獲りて年々あとし
 謎のことききものを摺り、えんを各家
 ニ差つてき其の解をえんを木
 製の丸版の價を取りつるもの
 こそ所謂の考へおとしのこえん



悠長世界の二紀念物と云ふを物
 へき點

複巻も今夕の出しおるどと揃池して
 晩おの湯を多き料理の曲みよ
 リお来る。星宮茶寮の式に倣ひ、小菜

珠に酒の
 下おこし
 五月十五の記

今日のぜんたい
 宇治川名品
 支那の山東
 備前山崎
 肥前佐賀
 北前道
 阿波鳴門
 信州佐門

鯉 曲水
 青 べにやき
 せ 三幸漬
 鮎 丹
 が 漬
 和 布
 口 白
 は ちの児

○服部耕石と印詠を交へてある間、一二の耳寄
りのことかあるは、一、能人一茶、二、之印と刻し
ル印を用ひたこととある、一茶と後款して其
下、此印を捺すといふ致向ハ宛実の思ひつ
きとてハ洒脱におせしるハ、汪啓淑が死
鴻巻の印譜を作つ際、二校正し、此稿本
が三冊河合茶屋慶の年々在る由で、これと
北京で獲たものとの相違、然るも其の姉妹稿
がいつの次が京都に流つておゐる、そのハ、園田
孤成といふ京都の印人が石表しとみるといふ
此稿もその種との者入がある、その果しん
啓淑の自筆かどうか、疑問とらうとあり



ハ茶屋慶ハ、ハシ人が為の茶心を改め淑の墨
をヨリ付、紙の老銘、捺原のまゝと程の紙を
て見、此所、全く同筆、とあることか知んれ
まふことある

(五月十六日)

○過日書及茶刻の度、訪合、略々千紙
に迫るの者も、元は、近年古しく、進め、字
ハ後名と、茶者、このこと、茶のまじり、審査
の結果、をやく、茶屋慶と、進つ、字、四紙の内、
名ハ三紙、まゝ入、茶、一、字、と、いふ
○いつ、紙の老銘、捺原のまゝと、程の紙を
て、紙を、交へ、字、折、捺原の、紙を、紙を、
す、ま、た、所、得、ま、る、ま、る、と、あ、と、為、す、或、ハ、四、別

阿ろしやと格惑を生じたるが、此院の多の因入と
會したるが、之れを始末せしむ余の思ひあり、又ハ
らぬ、同寺圓祿の北火に罹り、新築せんが、
口余く旧態を復し、多しと、余が、高台寺を
訪ひし、三十致多、前日、阿ろ、僅らの間の、変化
ハ、此也。

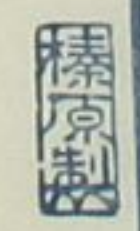
○京都西本願寺に後さん、豊公、掘山の達者、
物中、珠に、大なる室に、湯見の間に、ある、多、合天
井に、書、山かん、れ、給、り、り、又、江、志、を、拂、ふ、人、日、に、或
許、る、る、目、る、る、へ、き、や、因、者、に、致、味、を、あ、つ、つ、
等、の、江、志、を、惹、く、と、り、の、書、物、を、因、者、に、送、
り、給、り、と、り、る、卷、子、冊、子、各、程、の、因、者、の、せ、
い、給、り、と、り、る、

因

まくの姿態が多々、描かん、事、と、一、三、の、と、云
ふ、と、得、べ、し、武、物、の、集、ま、る、所、に、個、物、の、因
者、を、送、び、給、り、何、等、の、因、者、を、あ、つ、つ、と、
か、ま、ま、の、昔、の、因、者、と、も、珠、と、せ、し、可、ら、お、
○此三四日、珠に、考、研、に、親、去、り、地、墓、に、直、取、り、
昔、に、十、和、田、湖、の、地、略、に、と、り、も、志、に、送、り、全、部、
者、を、更、し、案、因、の、お、り、者、を、更、し、書、行、り、る、因、
次、生、流、の、一、命、を、補、正、す、来、月、文、的、抄、の、一、命、を、
開、會、の、戊、辰、に、念、念、に、領、布、す、と、し、冊、子、の、因、
戊、辰、の、因、一、命、を、伝、り、即、刻、に、因、者、に、送、り、
因、命、を、傳、り、因、命、を、傳、り、因、命、を、傳、り、
あ、

五月十九日記

○昨の権左所附の荒木十敵院：十敵公をひらく
此宅の故土子金四中の山宅に建物をしつとも也
尾庭の可多層ろく花弁を植える小舎を飼小舎
宇生の材料也川生の小舎の前：筆をふり
つ、あるを認のり、血来の画家にこんあとの師を
とめす収入の多き知るべし、まらじ研と墨を
示す、程君、房、其由地、作墨、四五丸七珠と
まぶし、物、作墨書を惜し、氣もろく、磨し、
書と、こん七山、此の画家の仕合といふて、
先代由寛、故の容中候し、受をもん、始終左
右侍し、候外出の時七丸す一人、池從し
他の家臣の池を許さず、寛敵、飲名拍



を流らし、まのあ、墨を、候し、候の、
護ふ、人、知ん、す、七馬の、勢を、潜の、
の、美、任、ハ、身、ろく、日、重、かり、と、
大、酒、ろく、及、し、寛、敵、ハ、今、く、酒、
と、り、候、ハ、寛、敵、の、酒、林、を、
候、ハ、有、名、の、酒、庭、家、に、
を、用、ひ、毎、日、之、を、
衣、類、を、脱、し、赤、裸、
二三の美術品あり、是利頃の前、
き、小、形、の、
床、容、中、が、秋、日、
秋、日、の、
秋、日、の、

揚と寛政の始終左右に侍しりて、一紙七揮、
高毛を費らひて、秋月の宛たるも簡
「寛政の治あり得る所なること秋月の題跋
に明かす、此日十畝并、二人の門生、席画を乞
ふ。

五月廿日記

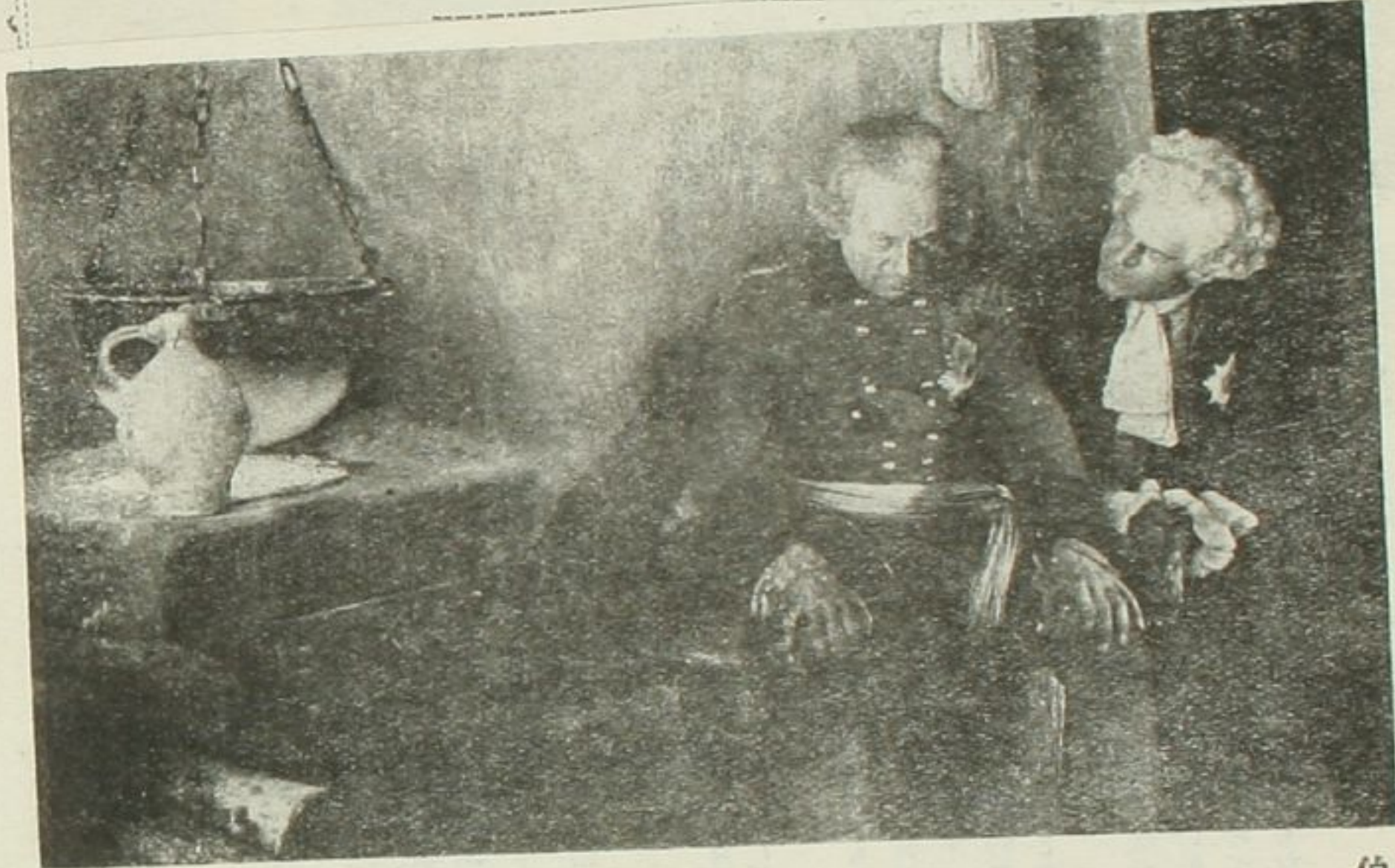
○蓬庵の島津公の花巻令、入札に附さるること、
書畫を乞ふ目録を案を未だ、既往に令て例を
絶つ大形の目録も、十五坪の出入り、此に九
物の雄鷹、及ぶ一説して懐懐の感なき、此
て、書畫の内探元目録、逆るを乞ふ出地
から左もあるべき、芳峯の大小の多き、
島津公此思家、特別風味を感する、

蓬庵

見、茶室の内大名物并、名物五七、
揚の外不出の果を玩賞し得る、時勢の
物と云ふを得べし。

○昨夜一時この系列の地震あり、玉振動急促
上下動あり、九分間續く、空源地あり、
此度の震と同一く、江戸川河口沖と傳ふ幸
入夜美あり、朝に途人が挨拶する、夜終
の上頭、石珠、及ち佛壇内、揚けたる四五の
言を、皆一方に傾く、市中二十所、火災
を、一時百あり、微弱なり、
震を感し、
五月廿一日記

An Ufa Picture
AN IDYLL OF THE OLD RHINE In 11 reels
 Frederick the Second Otto Gebühr
 Elisabeth Christine Emma Morera
 Princess Amalie Eva May
 Frederick William Albert von St. Inneck
 Prince Desauer Eduard von Winterstein
 General Brunswick Leopold von Ledevour
 Leutnant von Katte F. W. Keiser
 Rhelndorf Fritz R. sp
 Marina Theresia Agnes Strunt
 Prince Kaulitz Werner Kraus
 R. E. Lushige.
 Scenario by Hans Behrent, Arzen V. Cserepy and
 Directed by Arzen V. Cserepy.



伯林チエレビー映画製作所特別作品 ウォーファ社發賣

ライン悲愴曲

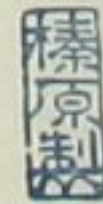
全十一卷

アーツェン・フォン・チエレビー氏監督

配役

フレデリック大王 オットー・ゲビュール氏
 エリザベス・クリスチン皇后 エルナ・モレナ嬢
 王妹アマリエ嬢 エヴァ・マイ嬢
 フレデリック・ウィリアム
 アルバート・フォン・シュタインルック氏
 デッフォ公爵 エテュアルト・フォン・ウィンターシュタイン氏
 アルンスウィック將軍 レオポルト・フォン・レデアル氏
 (梗概) プロシア中興の英主フレデリック大王の波瀾に富んだ生涯の物語である。千七百年代プロシアが未だ弱少の頃、その王フレデリック・ウィリアムは、鐵の如き意志と勤精をこめて知らぬ努力とを以てプロシア國を強大になさんと志した。彼は王子が佛蘭西文學や音楽に心酔するのを快からず思つてゐた。で、父子の間の性質の相違は常に一抹の暗影を宿し、王子は父に對して、子としてではなく奴隸として待遇する事を難するなど、反抗の氣をも示したのである。その後、王子は遂に堪りかね、友人カッテ中尉と共にプロシアを逃れ英國へ走り込んだ。が、事未だ成らずして發覺し、二人は捕へられた。その上、カッテの死刑に王子をして目撃せしめさせた。併しやがて王子の心中にも「汝の總ては國家に屬す、汝個人のものに非ざる」自覺が生れて來た。父子の間は次第に緩和せられて行つた。好個の青年武人たる王子フリッツにも軍事一方のみの生活が續いた譯ではなかつた。父王の命令に依つて、王子フリッツは姫エリザベートと結婚した。

説明 渡邊一秀 徳川夢聲 伴奏曲目選定 貫洞喜代治



一而うす前の体にお武蔵の故の映画を見ても中々ライ
 ーンの悲愴曲といふが興味を惹いた。プロシヤを具
 してフレデリック王が渾身の力を申す。此の故
 其始終の動心や、先帝中絶に冷涙があつた皇
 太子が王位を継ぐ。父王の志をつぎ、或
 大なる戦闘を自かた軍を替へて終に勝を
 する。戦場の大場面。大仕掛のプロシ
 ヤの盛時を思はせ。今將にプロシヤ
 の状に行ふことぞ。プロシヤ人。此の映画より得るもの
 此の映画より得るもの。道感概を括り得るもの
 〇来月戊辰記念会を聞くお、記念陳列を為

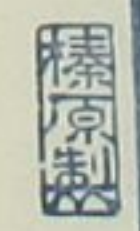
多く目下陸列まき紙名品に油中うゑ試み
家制のこのは松南もこのあるやとあるまゝ
の流元年のこの甚い少きけん前後のよ
を合せんは十枚紙あり

一大統領督兵部卿者秘家一海主定記
和久久澄自筆

一 聖駕を迎へ奉る長歌并に江戸市
民、酒を賜りたるを記念する和歌
中村清矩筆

一 目江戸遷都の建派也并に其休末
前島冠男自筆

一 和久家のまき、勤方を責めん御
書



士とますの公文書

一 御巡幸の節特に行在所に於て拜謁
を物へる者の書者 (これへ家書)

一 幕府政府の印

一 和久家御官印

一 和久家御官名和後の書牒

一 和久家御官名和後の書牒

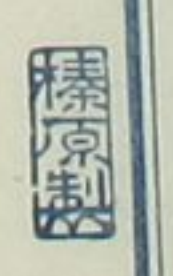
一 和久家御官名和後の書牒

一 和久家御官名和後の書牒

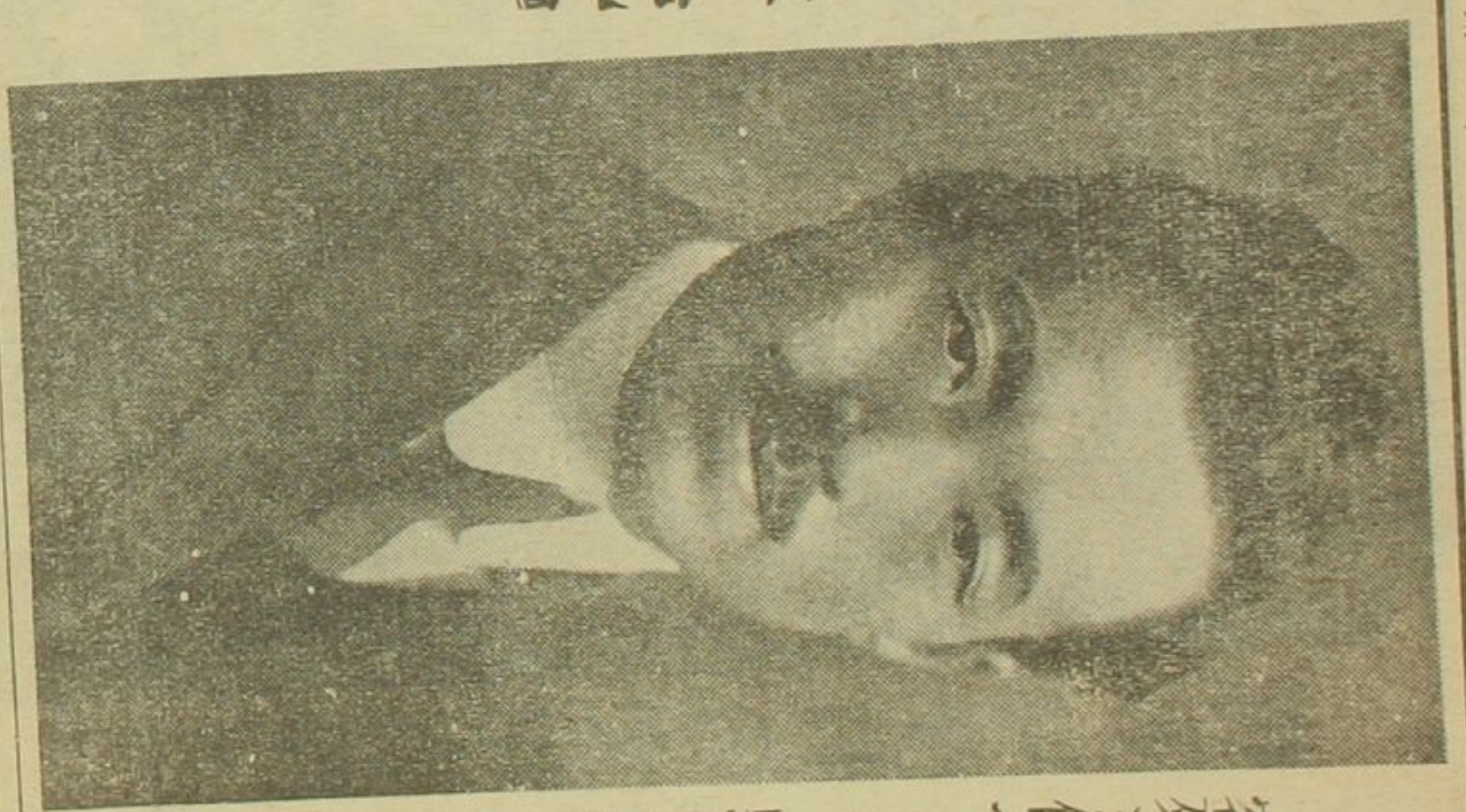
一 和久家御官名和後の書牒

強心堂のまきと関す

- 上野、園と病院を設く可なる史考の文書
 - 築地長巻地圖二枚
 - 乗合はろし
 - 神奈川好布達 印刷本 五甲
 - 鉛筆、鉛筆
 - 岩倉公に對する勅語
 - 御巡幸御供儀官録
 - 賞牌圖式
 - 寺子屋油査書
 - 外人就書、花巻者 改本
 - 兼、法六年
 - 外、新、兼、ボスター
 - 若田入船双六 廣正信
 - 一、清八辰
 - 鶏助雜交 忠信
 - 一、没、淡、初、年
- 授家と經れんる者多し何んか (五月廿二日)



○此の英世が貴族研究の為の亞弗和加に出張中
 一、其執に羅く、犠牲、さうつと、此、新、開
 一、大、換、表、と、い、て、る、を、得、ぬ、今、が、自、人、の、隠、事
 一、中、に、此、人、を、出、せ、ん、と、い、ふ、女、の、あ、ら、ま、じ、り、の、爲、を
 一、書、と、い、わ、せ、し、め、り、の、即、文、つ、れ、こ、と、を、と、ち、の、れ
 一、か、ま、ん、を、印、刷、し、出、し、て、ま、い、る、由、の、新、の、教、育、に
 一、格、下、と、い、ふ、格、下、の、思、ひ、の、う、ら、ま、つ、れ、一旦、考、い、れ、茶
 一、稿、紙、進、埠、の、志、を、定、め、る、か、ま、ん、考、き、直、す、り、必、要
 一、か、ま、ん、の、い、ま、す、く、貴、族、の、心、を、お、月、廿、三、日



客死を傳へらるゝ野口英世博士

黄熱病の研究中 野口博士客死す

西アフリカで感染し

尊き學界の犠牲

ロンドンに訃報傳はる

【ロンドン廿一日電(帝國)】西アフリカ・ギニア・コンゴのフタりの船に上り、現地醫學界に世界的名譽を有する野口英世博士は黄熱病のため遂に同地において死去した。博士はロンドン・エドワード・グレンジャー・醫學研究所より西アフリカへ出張黄熱病の病原研究中に自らも感染したため、近々ニエロウへ歸る船中であつたが遂に加療行時が過ぎ、博士の體がロンドンに墜するや當地醫學界は博士をもつて貴い聖界の犠牲者として哀悼の意を表してゐる。

野口英世

〇應のスパークの如き、一瞬か別ち千年の室の
者より理窟を何ぞも。唯此後伍者ハソク
の理窟を云ふは、皆真諦を觸るる也。
別や映畫の巻の巻、一僕も興味ある
が、此れ文藝が死心セントか之を平凡とする。
其の送の實行家が、此れも知らざる、其の
家の清さの本職である。

〇内閣改選の予報に、頃々吾等の興味をそそ
閣内は異論多き久原房之助を物次上院と
入閣せしめんとし、其れが為め三土が、おれも文藝
地位を懸して、まゐるふ、其れが、三土は、終に、軟
化し、久原の内閣なること、まゐるふ、其れが、おれも、飽く。

○あると者高をそのあしめりてせぬの次の間と玩り
 小冊を排列してゐる棚と帳付合から取らん紀
 念品がある。まゝに排列と陣列とあるものから
 又蒐集したよものいろいろ、古い間の骨付並道楽
 小冊や年々入つたよもの多し、或は記念とて人
 から贈えられたよものや、遠方から土産に送つたよ
 なものもある。卒利として見れば、玩具の陣列
 の類々あるが、實は小冊骨付並が可きもの
 部分とよめられ、お中：執事もあつた便儀の
 あるよものもある。今屯まらざるものも揃ひて
 一 佛像の内々、六相佛、三基、西親、心
 の黄銅の観音、木彫、湖廣、像、味根



細工連、麻屋、鎌倉時代軍神像、唐代
 立銀土佛、鐘の袖と装束の佛、堀子
 円形厨子中の彫刻佛像
 一 茶類の内々、茶の寺の古材を以て心より
 小箱、大佛殿の遺材を以て心より香合
 御所加わりの香合と換へる香合、雲四
 女殿の縁毛マシ、丸と以て心より
 小匣、伊大利製、セサ、ウツ、匣、英先
 利製、銀、ウツ、マホガニーの桐子、長
 一 圖書の内々、豆帳法華經巻、豆本巻
 子経巻、豆本、沙、あ、全集、法華、豆本
 書、書、山、帳、教、巻、豆本、世、界、各、四、字、巻

小品外四待集 皇本拓本考証 午丁下
 胎内証 皇興春香 皇本山の粉本
 一 外四品の内より 馬來半島製茶の牛の彫刻
 一 竹馬 瑞西木彫人物三基 角
 彫刻(竹トローネポーン 銅製佛符
 スボーツ彫刻銅牌 十位 支那製
 木彫人物四卓子杯盤陪屬 伊太利製
 サジ 羅馬のカンテラ模造 支那製紅
 砥楳船 米四レーンフォル産 郵便切手
 箱 大戦中獨逸製行の紙幣 英四
 製人物彫刻呼鈴 ボヘミア産黄銅
 硝子小器 外四家製里ガラス小皿 提瓶



印度人物

一 銀器の内より 菊御役章憲法別布紀念
 菓子器 小品花瓶 木子王家紀念品
 父母帳 扇形銀器 紀念カマゴ三
 日本石油會社紀念品 銀製湯子入
 銀の印材 銀錢 金印 金銀製
 紀念章 スパーン三 柄形と
 一 雜物より 封泥 明器鬼 筆下骨片
 古活字 錫杖 皇本深百巻 皇本深
 代物珍 十六世々々 曉海心婦人像
 佛果双六賽 朱竹地中像銅牌

狩野鐵炮刺針の桶形菓子盒 林葉庭
 左近の橋を以つて心うり茶杯 ぎやまん海
 敷 エデンハウ名所圖 時代寫り三人
 官女 黄銅牧羊書鎮 木彫軍勢
 木彫牛背牧羊 小品硯 碓形墨
 狩猪紀章 二本位紀念銅章 犬張子
 一雙 乾漆魚一雙 白磁スワン一雙 尚久一
 心兜 瑞西回舍家 三ツ塗小箱
 蓬萊島基 朱塗西机 まいぶどう長方形
 卓 狩野鐵炮心鋸音こつた拾盒一枚
 ギリシヤ幸福の鳥 伊太利製双酒瓶
 獨逸の鈴 ミエエンヘン麦酒の額 仁清

藤原

佛國海峽未ベギン島海編 タチノラ入形(佛)

心向出心重塔 土製塔七基 木彫小品佛
 像 西洋紙キリ三種 木彫アイト男女像
 以上まあり玩具七交り居んも大体小品骨
 董より珍とすべきものも相あるあり以上而
 故靴の外ハ玩具各地に有名なるもの概々
 備うてある玩具の全体ハ別に目録もある
 から、この記さるゝが、小品骨董を玩
 具と同じ扱ひをせぬやう特く愛し掲記し
 ておく。

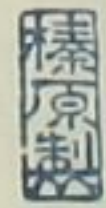
〇外國人の自然讚美を説く、而して自然讚
 美の實を説くよる多し日本人の先天的、自然讚美
 家也所謂の風俗と云ふは、この事、単位の階級

四 豪族を被村

五 名田百姓村

六 古代武士農村

以上の内ホニの隠適村と云ふの昔は藩主の過酷な徴税に堪へず藩役人の目のとびかまひ山を僻地に逃げ隠れし人々の村屋にあり、徳川時代の後武者の住居しともいふに居る。ホ四の豪族族屋村に豪族屋敷を中心として立つてあり、村屋の屋敷に此種の特権を根付く村といふ。ホ五の名田の住居しと云ふは由緒の家の柄又ハその地方の有力者が藩主にその地の開墾の特許を受け、る地を川幸と開墾せしめ、其の成



主の後任豪族が地主と云ふる姓が中心と云ふ村を云ふ、他の説めるといふ事いふ。

の上、此の農を偏重し之を公民とし、他を輕視し、非公民とし、之を私民と云ふ。萬葉集に此を公民の詠が二首あり、一は漁人と歌つたよ、他は狩人と歌つたよ、ある。此等七公民を供養するといふ事あるけれども、此の区別がある。公民の農人が供養するもの、此の区別がある。公民の二字の通世の意味と云ふお前がある。知れん、徒食の私民をいふ人の口の範圍に属するもの、ある狩人、譯比が、えん、常を云ふ、公親、自由である。

○五刑時代の農を偏重しつければ進之重欲殊亦
び百姓がはたかたあつた方々も進け隠んたあ任の地を
求めたことか浮山とある。銀も後より百姓の無い
のみ困人がいろく中心房しと兼した。高野の逃
る姓を走百姓と云ひ。時呼ひ度と云ひ。あつたこと
ある姓と云ふれ。

○百姓の急を救ふ為め福や銭を貸しつけられたこと
が古代の事。こゝに善政と云ひ。民を憐れむ上から創
つたものもある。地方官が善政を遂行して非
常の高利を徴して私腹を懲しる姓を
注かせる。其の利率は十割といふ。あつたこと
あつた。此の條も一つけを出奉るといふてある。



○余が池田に収まるく鍵といふ田舎を憐れし
終に錠の事をもあつた。貞操錠といふ。親を敬
説しつた。あつた。思ひあつた。二階
を要することもある。久保錠を羅馬時代
といふ。漢の初め中世時代モクルセルド出征
の時、竹守屋のあつた。施したと云ふ。方がい
た。六分。昔物終に河成がある。いふ。高く閉
ちこめて。あつた。人が出んとすると戸が其殺那に閉
ちた。いふ。あつた。ことか出果る。いふ。あつた。日
事七錠。関係する。いふ。錠の大小や其
の價。親し。追か。要する。錠のあつた。入る。い
ハ金庫の錠。い。大金庫。前。而。の。扉。全

部が錠ひある。そして其錠を三萬二千
圓の價がある。五月廿九日録

○馬津家の賣主は此の開札を終り、餘を配り、
りも二十萬圓を増加し、百萬圓を突破するの上
果む、大石物の奉入が十二萬圓、其の刀が五萬圓、
同量の珠價を現したる、取引を以て、あつた
る。○くまの年とすへは、特命書方座の給が何れ
豊前にあると終つたが、甘き座の馬津家の御抱
給ひあつたこととすへは、賣主中の依服を教
へし、よゝん、銀葉の風流より純金の金か拵
けとあつたことだも、こん式のこと大なる拵し何か
あつた。



○此頃アフリカにて其地研究中、其疲乏感、夫
ふし、此の頃の英母のその果の以て、傍りなきをある
あつて、私の首を、別居、振へば、折、記念、と、
真一、二枚の額面、一枚、現本、書、いた、心
道、如、不及、と、ある、こん、開札、唐、主、人の、為、す、と
あつて、開札、唐、の、余、か、別居、を、作、した、の、私、ある、四五
ヶ、前、こん、と、取り、出、して、家、に、持、帰、つ、つ、や、して、思
ふ、ふ、此、の、四、字、の、余、を、蔵、する、よ、の、ひ、ある、か、願、ひ
れ、此、地、に、彼、ん、を、蔵、する、よ、の、ひ、ある、か、願、ひ
ん、か、近、年、志、き、う、よ、本、地、に、出、法、し、危、険、する、病
毒、と、我、つ、此、の、種、を、柄、と、い、ふ、遂、に、其、の、犠、牲、
と、う、う、年、つ、此、を、い、い、過、つ、る、い、ふ、さ、る、如、き、憾、を

後、菓子箱を包み紙の一端をおめて記念
とする。

の来月開會の戊辰記念會の故志の印刷を出来
たから多々おめをせよ。



明治 昭和 戊辰記念會趣旨

文明協會は、さきに、創立十五週年を意義深からしめるために、明治文化發祥記念會を大隈會館に開催し、内外多数諸名士の御來會を得て、そごろに維新文化創設當初の一般情勢、先覺者等の暗死的奮闘努力を追懷思慕し、併せて新文化の建設に資せんとする理想抱負の一端を示唆するところがあつた。同時同所に開催された明治文化記念展覽會は、單に世人に好奇の眼を瞠らせたのみでなく、學者思想家の研究慾をも唆るところ多く、意外の視聽を集めたことは、改めてこゝに贅するまでもあるまい。

單に以上の事業のみに止まらず、本協會は、東京市内四ヶ所に、略々時を同じうして明治文化發祥記念講演會を開き、それらの専門研究家に依頼して、維新文化の跡を徹底的に紹介、解剖、批判していただき、萬都の好學家に異常な刺戟を與へ、延いては學界に大きな波紋を畫くまでに至つた。更に明治文化發祥記念誌を發刊しては、今まで隠れてゐた幾多の新事實を明かにして、明治史を編むものに得易からざる活資料を提供し、且つ明治文化建設途上の外人功勞者を殆んど網羅して、それぞれ精密なる傳記を附し、その業績を讃へたので、諸外國の代表者より深甚なる感謝の意を表され、延いて國際文化の精神を發揮する機運をつくるに至つた。

斯かる文明協會の催しは、文藝、思想、教學界等、廣く社會の全般に大なる反響を及し、爾來明治文

化研究の熱度は俄かに高まり始め、温故知新の精神、文化の内省批判の傾向漸く顯著となり、明治文化の研究物は讀書界を風靡するかとさへ見えた。この精神、傾向に魁して、その露拂ひをした點は、文明協會の窃かに誇りとするとところ、そしてこの榮譽を擔はしめていたゞくに至つたのは、一に本會に深き理解と同情と聲援とを惜まれない方々の御蔭とこゝに深く感謝する次第である。

爾來文明協會は、幾多の新事業を重ね、益々發展の域に進み、本年は將に創立二十週年を迎へることになつた。時恰も昭和戊辰に當り、この一事は直ちに明治戊辰に聯想を運ばしめずには置かぬ。明治戊辰は、誰も知る如く、維新革命の初一年で、王政舊に復し、政治、財政、宗教、教育、思想、文藝、社會制度等、社會生活萬般のものが一新されるの端緒を開いた年である。これを今少しく詳しくいへば、徳川幕府下に於ける封建制度の諸文明が爛熟期を過ぎ、その病弊膏肓に入り、將に一國の生命をして危殆に瀕せしめ、大改革のメスを振はしめるにあらざれば起死回生の望みなく、こゝに天の配劑か否かは別として、維新の大業が斷行された譯である。一切の舊習舊慣は一掃され、宿弊悉く地を拂ひ、舞臺は俄かに一大回轉を遂げ、新文化は恐るべき高速度に於て、熱と力を以てその完成の域に進み、西歐諸國が二三世紀を要して得たる文明を僅々半世紀の間に築き上げ、歐米先進諸國をして驚異の眼を瞪らしめるに至つた。けれども文化の達成は必ずしも善果善效のみを意味しない。惡果宿弊のこれに伴ふは自然の數である。而も他方に於いては、維新當時より理想とせられてゐた制度法令の如きものにして未だ實現の運びに至らず、新文明も亦自からにしてその缺陷を暴露し、これが改革改新を促さずにはゐない。

而して昭和戊辰の今日は恰もその時期に際會してゐるのではあるまいか。今日第二維新の聲の盛んに聞かれるのは抑々何を意味するか。政治、經濟、社會、思想等あらゆる方面に於て世人は何とはなしに不安動搖を感じ、春風駘蕩、生に安んずるの情趣の漸くにして稀薄化せんとするものがある。生活不安の問題、労働問題、社會問題等は、今や戦争、外交等の問題以上に痛切なる考察を要する事件になつてゐる。又、思想問題の如き世人をして今日ほどその歸趨に迷はしむるの甚しきはあるまい。文藝思想の如き、徒らに人心をして虚弱浮華ならしめる文化を謳歌し、これに迎合するの風潮烈しく、ために正しき文化促進の力たるべく、全くその誇を失つてゐる。教育、道德、宗教悉くこれ社會の一部階級者の保護色の如き觀を呈し、全般社會民衆の指導力、精神力たるの價値を失つてゐる。スペングラは既に西歐文明の没落を叫んだ。而して日本の文明に彼の叫びが果して無關係であるといへるかどうか、頗る怪しくなつて來た。このまゝに若し日本の文明が進んで行くとしたら、その軌道は、恐らく山の嶺にはなく、谷間に通するものではあるまいか。

けれども、一面、喜ばしき現象は、刷新改造の叫び聲が天の一方に聞え出し、その實さへ歩一步擧げられつゝあることである。普通選舉の實施は改新の第一歩で、或る意味で異常なる政治革命である。これが健實なる發達は、社會問題、労働問題の大部分をも解決するかも知れない。近く實施されることになつてゐる陪審制度は、法律上の一大進歩で、これがためには社會道德、教育の方面までが、その影響に依つて大變革を來たすかも知れない。これ等の改造變革に依つて、社會制度や社會生活の上に種々な

化研究の熱度は俄かに高まり始め、温故知新の精神、文化の内省批判の傾向漸く顯著となり、明治文化の研究物は讀書界を風靡するかとさへ見えた。この精神、傾向に魁して、その露拂ひをした點は、文明の變動の生ずることはない。

斯様に社會的、政治的、法律的、その他の一般の事象が變革され、若しくは變革されつゝある點では、昭和戊辰は明治戊辰と著しく類似してゐる如くに感ぜられる。特に恐れ多くも今秋を期して、今上陛下御即位大禮の式典が舉行されると漏れ承はつては、明治戊辰の明治大帝御即位の當時をさぐる忍ばすものがある。

けれども、第二維新の改革はまだその緒についたばかりである。その前途や遼遠である。この重大時期に於て如何なる理想抱負を以て改革の業にあたるべきか。この考へは維新創業の先驅者等も等しく抱いてゐたところと信ずる。

この意味に於て、昭和戊辰の日本は、恰も明治戊辰の日本が、社會的にも、政治的にも、財政的にも、その他萬般に亘つて大改革を必要としたと同じ位置に立つてゐると見ることが出来る。こゝに於いてか、明治戊辰の社會と昭和戊辰の今日の社會との比較の興味が湧き、明治戊辰の業績を回顧しては、昭和戊辰の第二維新に處する覺悟を決することが出来、以てこの戊辰をして、かの戊辰の如く有意義、有價値ならしむるに至るであらう。


文明協會はこゝに鑑みるところあり、今月を期して、明治昭和戊辰記念會を開催し、六十年前を回顧して今日に及び、以て昭和の戊辰に處するの抱負、理想並びに覺悟を明かにし、健全なる新文化の建設に多少なりとも貢獻せんと欲する次第である。講演會、展覽會等の開催、記念誌の發行等、略々明治文

化發詳記念の折に倣ふものであるが、新事業として企てたものは、「明治戊辰と昭和戊辰」なる大著述の刊行で、既に編輯部に於ては、新たにこの方面の研究に造詣深き學者を得て、大に學界に貢獻せんとの意氣により着々と材料蒐集、整理、編輯の業を進めつゝある。

以上は今回文明協會で行はうとする明治昭和戊辰記念會の目的と内容との輪廓のほんの一端をもらしたに過ぎぬ。微力、到底かゝる催しを完全に實現し得ないことは充分悟つてはゐるものゝ、一つには斯かる催しを試みるに他に見受け難く、二つには斯かる難事業をも敢へて企てることにこそ文明協會存立の意義はあるものと考へたので、敢へて萬難を排して、この計畫を企てるに至つたのである。文明協會の微意の存するところに大に共鳴せられ、明治文化發詳記念會の折にもまして深き同情と理解と御聲援とを篤と乞ふ次第である。

昭和戊辰六月

文明協會々長 侯爵 大隈 信常

○昨、梨本名神の茶合の於、正木美術の授り、長の
後、博覧館と保身しつゝある、茶室の寺の吉祥天
の繪、硝子移入、七十年七陳列してゐるが
北沢久方振に見て着る、麦代を来したる、一
番を喫し、昔一見し時、着るも、古に華、襷、
あつた、記、隠す、つ、為程、夏つて、お、美術、
校、花、し、つ、麻、の、画、い、れ、去、祥、天、の、方、の、
出す、こと、か、ま、い、為、め、ま、着、る、名、大、ろ、ま、夏、代、を
認、め、る、風、化、作、用、や、日、見、る、晒、す、こと、保、存
上、研、究、を、要、す、と、レ、レ、と、感、し、れ、と、語、つ、た、
と、の、偶、然、巧、術、社、が、復、生、を、し、た、ま、を、喜、ぶ、ら、
と、来、た、人、が、あ、つ、て、昨、の、正、木、の、話、を、思、ひ、記、し、


又、と、成、る、を、い、は、し、る、復、生、も、し、れ、お、思、は、ん、だ、
實、の、復、生、の、現、に、逢、つ、た、の、か、あ、り、こ、ん、を、思、
ふ、と、山、崎、の、繪、の、ま、ま、に、成、る、丈、急、い、て、工、
を、作、る、こと、が、大、切、じ、あ、る、や、と、感、心、し、た、
三十日記

○正木の家、百喜のへ、に、内、國、湖、の、ま、ま、に、復、生、
一、千、八、百、年、の、信、の、費、を、支、出、し、し、お、つ、た、其、
義、の、指、名、民、保、護、と、い、ふ、ま、ま、に、あ、る、ま、ま、に、
と、あ、る、之、れ、を、喫、き、つ、け、つ、た、ま、ま、に、未、だ、
の、内、に、千、八、百、年、の、復、生、の、話、を、も、つ、た、
支、那、人、の、論、を、い、は、す、横、地、し、て、未、だ、の、復、生、
を

我々吾民之行は、其暴南東も、牛好のり、又
とる、我出、能行、為の、及、動、又、おる、も、政府の方
針、川、向、砲、立、七、列、四、の、留、昇、思、を、た、め、を、或、と
在、吾、民、の、保、護、止、ま、る、と、お、う、め、し、た、う、と、さ、う、か、と
思、ふ、と、不、相、意、の、大、兵、を、動、か、し、た、う、と、あ、る、内、実
支、那、以、越、え、部、と、首、相、獨、り、太、入、る、外、務、者
ハ、幾、人、と、交、往、を、祝、ふ、海、陸、軍、と、外、務、の、連、絡
も、あ、る、と、し、と、云、ふ、が、実、際、也、田、中、ハ、外、務、文、に
あ、せ、て、る、ハ、勿、論、日、英、と、結、ぶ、も、休、官、程、が、人
と、云、い、ん、と、あ、る、北、人、の、為、さ、し、任、じ、と、支、那、問、題、が
推、移、さ、る、か、つ、り、成、り、行、く、こ、と、ハ、思、へ、い、其、心
ニ、地、へ、さ、る、也、一、解、日、本、を、公、敵、と、し、支、那、の、南、地



あ、軍、一、改、し、と、あ、る、こ、と、あ、る、か、つ、り、成、り、行、く、こ、と、ハ、思、へ、い、其、心
那、の、形、勢、も、と、い、ふ、多、分、決、し、と、無、し、と、云、ふ、の、も、た、田
中、政、府、の、内、地、に、控、け、る、獨、立、ハ、今、掩、え、と、ま、す
七、能、い、て、る、こ、と、も、あ、る、と、い、ふ、北、領、事、ニ、乘、ま、る
こ、と、願、う、な、り、得、べ、し、と、申、す、ハ、大、山、友、と、し、と、危
う、き、こ、と、も、あ、る、日、本、ハ、支、那、と、支、那、と、援、助、を
列、國、に、あ、ら、し、め、る、ハ、方、略、さ、る、と、列、國、の、お
先、こ、つ、つ、い、ん、と、吾、ん、先、づ、刀、を、抜、く、と、い、何、る、と、い
あ、ら、う、か、北、先、也、何、成、り、行、く、と、い、日、本、ハ、頗
る、不、利、の、位、地、に、立、つ、ハ、火、を、踏、く、と、い、何、か、さ、う、
兎、角、支、那、の、女、を、悉、さ、さ、ま、う、と、考、へ、切、り、と
其、の、源、の、日、を、政、府、と、あ、る、一、氣、附、の、お、お、を、い、偏

へは支那を徴するやしと云ふは近視眼也甚しと
云はざるを得ぬ現に尤も國家の重大問題と
支那外交を云ふは是れ比すべし内國の問題は是れ
と云ふべき也

五月廿九日記

○前に記しし和親を官と久慈宮の才としるは誤也錫
嶺家の布衣成りてをの能備也錫嶺家ら未だ男
子一人も在らず官家の例とて男子の相続有らざ
時二代限りを断絶するにせ女子の嫁たるは
も御内之家と持せし今之官葬をの後に家
宅尾を全部を譲らるるは御内之家と云ふ



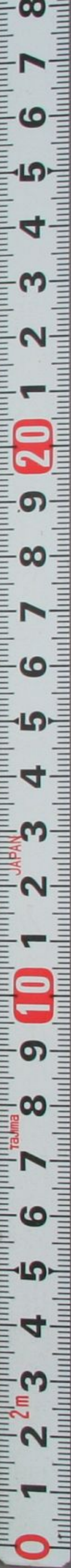
野館

BRITISH INSTRUCTIONAL FILMS SUPER SPECIAL

THE BATTLES OF CORONEL AND FALKLAND ISLANDS.

Made with the co-operation of
THE BRITISH ADMIRALTY
and with the assistance of
THE NAVY LEAGUE

武蔵砲艦に於ける映画 六月十日 開演
コロネルとファルクランドの英獨海戦



今は亡き勇姿の面影

「演出俳優の身代り探し」

本映畫で沈没する英國軍艦「グッド・ホープ」は獨逸軍艦「シャルンホルスト」は何れも撃たれてからは模型に代えられ大タンク内に貨物大の二艦が數萬圓を費やして建造されて甚だ實感を出したが、困つたのは出場する著名勇士に扮する俳優蒐集で、之ばかりは金錢だけでは何うもならず、四方八方に懇實で似通つた人を探し、その中より少しでも俳優的素質の多い人を選んだ譯で、表面に現はれぬ製作者の苦心は並大ていではなかつた。特に今は故人であるフィンチャー卿スターデイ提督クラドック少将チャイルズ氏等は凡ての人々によく知られてゐる人だけによく似た人でないと出演させる事が出来ないで随分困つたさうである。

更に此映畫で、獨逸側として映出される場面には、特に曾つて獨逸海軍に屬してゐた獨逸人を二百人餘り雇つて飽迄史實の再現に忠實ならしめてゐる。戦前フオークランドの大艦で撃沈したシャルンホルストの砲術長で後シュトラントの海戦の頃デルフリンゲルに乗り組んでゐたハンコウ少佐も此中に加はつて居て獨逸海軍の禮式其他を本式通り此映畫で演出し獨逸魂を醸りなく發揮させて居り獨逸海軍らしい氣分を一層濃厚に見せて呉れて居る。

この既述に其の映畫界の試みは英國政府が
映畫の制作を冬に於て此の如何かも實際に於
て潤色を加ふるにありてある英國海軍の加ふる

世界の大戰に獨逸が南米
智利のコロチルを英艦も
打破つて河もさく、フアルク
ラント沖で、英艦隊が復
讐し此事宜い尚味を尋
の記憶と存してゐるが
今其映畫が武將
の情に上演せしこと
から一説に

ブリテイッシュ・インストラクショナル映畫
フオークランド島の大海戦 全八巻

〔解説〕英國海軍省及び海軍協會の援助を得て製作された教育映畫で、コロネル及びフオークランド島の海戦の實況を潤色することなく再現したもの。ハリ・エンゲホルム氏が海軍大佐フランク・パーリー氏と共に撮影台本執筆、ウォルター・サマーズ氏監督、登壇の顯官將士には特に容貌の酷似せる俳優を選拔し、パーラム以下三十八隻の艦船が出勤し、實戦を髣髴せしめて居る。

〔略筋〕一九一四年十一月一日フオン・スピー提督に率ゐられるアルンホルスト以下四隻の獨逸東洋艦隊は南米智利國のコロネル沖に於いて、クラドック少將座乗のグッド・ホープ以下二隻の英國南米派潛艦隊を撃破した。元來この英艦隊はフオークランド島の貯炭所警備を兼り貿易航路保護の任を帯びた比較的劣勢なものであつた。之に反して優勢な獨逸艦隊は此の英艦隊を全滅せしめる爲めに快速を利して日没頃までは敵を牽制するに努め、日没時に至つて水平線に鮮かに艦影を描出した英艦隊を齊射し旗艦グッド・ホープ及び一隻を撃沈した。残る一隻のグラスゴウは闇に乗じて辛うじてフオークランド島の根據地に逃れた。此の敗報傳はちやファイシャー海相は雪辱の爲にインフレキシブル及びインゲインザールの二巡洋艦を直に南米に急行せしめた。斯くて十一月八日には早くもフオークランド島に到着し、スターター提督は二巡洋艦以下五隻の優勢なる艦隊を編成して獨逸艦隊を待った。斯くして歐洲戦史上に壯烈なる一頁を残す大海戦の火蓋は正に切られんとする……

説明 丸山章治 石野馬城 徳川夢聲 伴奏曲目撰定 貫洞喜代治

の協力し此の者業の
切抜を航附し
は中一に譯ハ、セキを
獨逸びエムデンの映畫
を此つて海軍の宣傳を
やつたるが統一的にあ
はつた、先から其業
其儘を見ざる映畫の
物と云ふべきを得ぬ

六月二〇日

- 小野東洋長簡一通
- 大久保利通木戸宛書簡
- 橋本左内長簡（四封）ハルレ下後（復）
- 肅親王書簡一通
- 前島胃音書簡一通
- 久米邦武書簡
- 大久保文雄書簡
- 犬養毅書簡
- 所田忠治書簡 以上四封大隈侯
義典の折り紙也
- 尾形聯兵衛大隈侯執事
- 男爵石見忠直書簡
- 田中光顯書簡

東京製

- 本宅盛衰書簡
 - 函谷北洋書簡 （二封） 取返り人
 - 今島雄佐書簡 （二封）
 - 内閣文庫開放建議草案 余の連成
 - 早大ニ理科ヲ開ク際ノ設計書案
 - 早大教旨草案
 - 去回半近畫巻分列在附近の風景
- 右の内大部分ハ落合の別荘に置きたるカ及本邦ニ在リしものヲ二つくの去來に於て保存を要スルもの也
- 六月三日記
- 長い河太陽の美術記者として記者料法朝の
ハ天平 藝術ニ憧憬のゆゑ、戦時時代の朝野

を作るまゝつた、美術研究から手を泥に下するもの
 比のこあるから、善悪の模造家のあす所と心ある
 おのつから風流かあり、心ある心なきが不のめ文
 今の時代の川格が現れんおせしうく思ひん、此
 頃其心ある頒布令を貴女表しれから、自分
 ハ玩具の類又興味を有つ折柄ひもあす、此

萬葉歌人塑造座像 (乙種)



(女 郎 上 坂)

萬葉歌人の中にて特に注目すべき人十
 人を選びて製作したるものなり、萬葉
 の豪快なる氣宇を生かさんこしたるも
 のにて風俗考證のごときは最も意を用
 ひたるものなり。すべて料治朝鳴氏作。
 種類



(大 伴 人)

上掲の彫塑はその一部分にして右より坂上郎女
 大伴旅人、笠女郎を示すものにて、以後十体
 もつて一組となす。その他は山部赤人、柿本人
 麿、大伴家持、山上憶良、狭野茅娘子、坂上大
 嬢、額田女王なり。塑造、彩色。
 大 い さ
 六寸乃至五寸の座像

定價

實費頒布にて、送料その他箱代、荷造り料等す
 べて當會にて支辨。一回分金參圓、全回分金參
 拾圓なり。

頒布方法

七月上旬第一回を配布し毎月一回上旬配布し向
 ふ十ヶ月にて完了。

締切り

六月十五日限り。但し百名を超過する時はそれ
 以後の申込みを謝絶す。

申込所

東京市四谷區北伊賀町十五番地 天平風俗彫塑
 頒布會。申込み時は甲種とか乙種と御記入の事。



(女 笠)

今に加入し、須布と云ふことあり、甲種
 といふ法隆寺五重塔式塑像童子を、あし
 大いさ七寸乃至八寸といふから、其の小なる方を
 於するといふ三種に加入した。左の三回、法隆寺五



重塔下の泥像群の中のものを探し、そのあ
 る、卷末の二のこゝに収めておく。
 ○四尊合する種々差支へる數回、欠席して、
 めが各尊の摸抄ハ其都度、報告が、
 々再寄りのことを、左に収めるよりの、
 其の一であるが、高打光雲の、
 心つ比小法かお七一あり
 六月五日記

ぬいれよのひあるから細工があと難儀ひある、その
金属は何物も修むる最も丈夫な二ツケル
スチール又はクロムスチールを用ひたる
より、錠の仕組、文字合ハセと、タイム、ロツ
クを保用してある。時計も二個若くは三個
装束を穿てある。一個狂ひを生じても差支るの
懸念もあらず、此のワロツクが勤くはる錠から
かり或はひらくのひある。より上の文字合ハセが
あけるのひある。此錠の日本及び世界に於ても
居る用いらるゝもの、其價ハ二萬五千圓位に
社の製成品が、



以上のことを堅固の麻ひ、酸水素を斯く
かけるを溶解する、泥棒、此の瓦斯も
吹つて、ワロツク装束の裏も目かゆる
溶解するのを例としてある。そこでクロム
の二ツケルひも弱く、あるより、更に
たんに、このド、ステン、ル、更なる
丸物ひ溶解することか出来ぬ。六月六日
の石川雅正の狂歌の巻を有る、彼等といふは、
其の傍を流るることもある、
流るることを知り得る、豊後を江尾の人、
重保といふは、美男子のあつた者、
六傳馬所の

旅人相糠屋の娘と慕はるる美ありと云う、美の家を
継ぎ七喜濟と稱し、石川の姓の多分美の家
姓より、西村重吉と云世傳と云、西村重吉の娘
奥村政信と云、西村重吉と名を慕はる、西村重吉の娘
西村重吉、性謙直花柳の巷と号を入ん、西村重吉
と云、西村重吉の時分を掲ぐと名手と稱せり、西村重吉
天正五年五月二十日、七十五歳没す、西村重吉

○戊辰従軍の事を念ルにまつて、明治初年の
回顧するの録を往々書の特に就て明治の
初年より成りたる刊書を求め、追懐の料に
供す亦一息するともせず、頃日手又つて同者三
四を左に録す。

一 明治十年刊

十年

の改考記録

宮内省刊

整版

四冊

福の美敷の序に徴する皇族の
の内者を出てたる編り集とあり、初め
皇族の思ふに及ぶ者あり、初め
新書の記述に切り抜き保存ありし
の火災に焼失し、今為の宣文者



求めしは、皇族の編り集とあり、
此考より、後述者も揮画とあり、
殊に士族以下の事蹟を採り、
る符と甘芳村の「かきま」在る
ハ、舊時代の貴族を包摂し、巻首
三條公の名字あり、元田永多の
漢文の序あり。

一 米利堅志

叢書版

二冊

明治六年十二月

続報社刊行

此書漢文と河内通之クワケニボス
の米田史を採し、其の儀更なる漢譯

二年

しるもの也。卷首の明治七年二月川田
寛江の序あり又明治六年中村敦彦
の序あり。海軍海軍の版あり。此考
の稿を脱し。明治四年十二月に
在ること五千枚の例言の末に綴
得し。當時高漢文を重んじたる
こと歟。〇を得ん

一 致知政教

巻放

二冊

七年

明治七年九月刊

西川 著

西洋のロジックを意味記したるものなり



日本に論理学の上木をえたる稿矢
とすし。安政のころより出来である
に其也

一 武公 有司集説

一冊

元年

利年を撰けり。明治元年の友友
録と云ふ。議定巻其を冒頭
挙げ。大隈の大名。井上。安政の大名。長
崎府の利府。うらと。掲出するも
又さ。

一 飾磨お布衣

流書

一冊

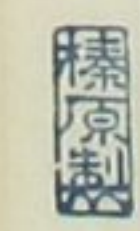
八年

明治八年中の布衣を綴りたるものなり

新紙條例 合衆國と郵便交換條
約、造幣規則、控訴上告手続、金
北外債公債証券發行規則、賞牌、
出版條例改正、烟草稅則等、関す
る重要の布達多く、粗悪の半紙、
隨切糲の法字を以て刷りたるもの
也、錦旗物中、權令の森林官昌
純より、直末の次初年の文献を蒐集
す、こと流し、此種のもの市の上、一
種の價を引く

一 東京日々新聞附録全冊

一冊



二十一年

明治廿一、廿二年の附録を全冊
として左の四種を収む。

春雪馬利那那の 雜記

北地危言

淡海評論

西域物語

皆福地櫻痴の著、此等ものなる標
題、並に須知、口人の筆に傳る。

一 勸業訓蒙

勸業

三冊

六年 明治六年 夏作麟 祥名を冠する板の
以て記述し、そのものなる原を傳聞

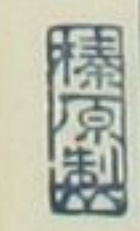
ボンヌの著書、不学校用印程の書也

一 金石小解 活字本 一冊

十二年 白石正年 白雲已毛部の鈔本に
係る、金石の名称に注脚を下し
るもの也

一 重家数一考 初編三冊 二編二冊

五年 白石正年 復刊 福澤諭吉譯
右の數と題する西洋の數訓也、
之の序に「きよもの也、白石の初年此
行のもの、物珍しく、讀みたる
一標をとらざるを遺憾にす」



八年 一 世界音楽 三冊

白石正年 金の抄久保秋葉の譯述
に係る、この西洋音楽の正統
版録である

一 ちう阿比波奇 二冊

七年 白石正年 浪華抄原伊祐著ある
の抄本も、浪華抄の序に「ちう阿比波奇」

六年 一 説教体裁論 白石正年刊

七年 一 説教問題十七説略 日新真子編 校書
甲府府立女子師範校
一 説教問題十七例 同上 白石正年刊

右三行は、雁新の陰浪沈なり、教義
の雨のけを詠ふもの也

親の権師道

伊言好海づら

とつぎく 宿

今好眺見日の本

たのむわら十歳り

おのげ錦織の紅

まはれ 木

心 福

あまのう

酒

親の大人たるは
まはれ錦織の紅
あまのう酒
心福あまのう酒



右にぬめたりと五十の風力揚士が越後より浮内
揚士の言に白雲人をもつてまきなるおの心をも
扇面の柿樹の道邊侍士の拙言也

○浮世繪界の珍なるあるは廣重の風景畫であ
らう。山水を浮世繪とすることの南無の格つこ
たまる。もし人物風俗を浮世繪の本態とする
に於てハ山水風景の外にこれよりあてあたらう
んが浮世繪家の筆に成り。浮世繪の形
式が成行せらんばある。浮世繪とて中
へんれまの筆にある。あかし之れを浮世繪
とて中へんれまの筆にある。あかし之れを浮世繪

るを得ぬ。彼人の筆は一派を削いたるありあ
る。彼れを歌川派とてその名のありぬある
流とあるがふふ南無とて。彼れが山水を
畫かいた動機を、東海道助を流のし
○これ凡の筆に感する所にあつての事であるが
せんも一に浮世繪界の中へ一め歎息を
しに浮世の美人繪役者繪の筆を流一徳に
飽きが来ればお楊梅の筆の自れを守し
らるる描法の改修は流の筆といふ
異うして、自れを流離せしめ大衆の眼を
怡しめたる因る。彼れが筆を流の筆を
巧む無つた。彼れが別一天地を開拓した

のハ彼んてえつそ仕人のあつたのみとて我信世
界に大なる光彩を添くは誰に於て幸と云ふ
べきにあらむ。

六月十日記

彦重の画が外人に賣せしむる初めは西人
の注意を惹いたは神の目をもひ山ありと云
ハ狩野や南畫に無けんかまのよあとしてん
とある山ありの南畫鑑賞家の因就むの
北界の力にしてみれば彦重の山ありと云
と洋画に採る所があるて遠近の法
も備はり後毛流法の極極も一に自然
と則つて外人の演説揚かすも偶れむ
まゝ。甲州の猿橋、阿波の鳴門の國

彦重

のことき、彼人の筆を譲りたる初め
若押さんといふも流る証言にあら
む。

の雪つと三本を多く惹き集む時、月宮雪嶺
の内書、春畫一帖を得、今も尚ほ花として
る、雪嶺の春畫を描くは七のを得れ
と稱せしむる、實に此の画家の任歴を
述べしむるも、今も尚ほの調へて見る
と、月宮の難ひ難ひとて、本姓の木田名、島
信通稱、丹下、信天、おの難ひ、(内江の人、大
阪に住し、畫を賣り、教輔とて、後法橋、
叙せしむ、彦重も時、此人、儼然と書し、

たと傳へん、關西の名人がある。天明六年十一月
七十七日早稲を毀し、其より子雲高法橋に叙せ
る。後法眼に進む。歌川昔芳年ハ乃ち其子で
ある。昔芳年ハ維新の前夜一派官守の終を
創めて浮世給と一紀元を畫し七のま、雪田
の門下ニ秀日オオセ多ハカ、石田玉山尤カあらハ
徳政を吟ハルハ大洞記七死人の筆カある。

○歎形蕙室の吾、歎後、因縁あることハ初め
知ハル。蕙室ハ北尾流の浮世給のハ北尾
政美ト云ハル。本姓赤羽氏ニ通稱三三ハ父ハ
歎後の人ト云ハル。其ハ歎後ニある。寛政十一年政
美生る。政美北尾を政ト云ハル。安永五年以未草

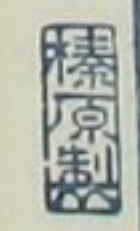


双紙の挿絵を心するもの多く、殊に名所の真景を
とよくし、當レ江戸の全体を一目に見得る。給
セユスレ一枚摺と云々、又更々之人を歎と
神田の神、物、彼人の経歴の跡あり、三十
五六歳とも志を轉じて浮世給を全然癡人
善も畫家、勤業、即ち盛名を博
シ、彼人の狩、流、光琳及山中村、其
法を創め、画漢を著し、世に稱せらる。其
用画手ハその定に彼人らも如し。これ
り歎形蕙室の名を用也、安永、福井侯に召さ
其抱へ給り、と云ハル。雅装し七給真と稱す。

果ては三伴一橋り自におもひ三枚
吉原秋に梅おほし三枚 ねん藤時舟
三枚 山つゝおろし三枚 内儀供男三人
浪子全孤山十境 陽田川流し舟
まゐり

歌麿む

南世全盛美人橋六枚 娘日時式四枚
川流三女娘三枚 高元美人六孤仙六枚
山姥に全下り 婦人おろし十枚
婦人おろし十枚 婦人おろし十枚 七枚
三田神社前あり 三 武家煤掃 五枚
橋上橋下の田六枚 針仕り 三



帝屋中跡の説の三枚

豊中八仙和詩

研中巻巻

家根舟四千伝 三枚

歌仙巻の印

白布の身び何事も久しく宝物をえはと思つたぬ
比喜あはれ親人會たすの屏分とえはのふむぬの
仕合にあつた、南まをる所の有えまよりの力六
行も出ておれ、よん七研究のぬ資料だが、碇も
いじりてえいさのいぬの多いのかまうく一あつた
海舟もいぬ何れもままかひあつた所へ奥床しく
思ひん、神物のちり客屋風も出ておれ。岩崎の
家の四條河原の春分も何事かをままの味

僧政、道融、僧寂、らるること知ら
ずる也。亦、防尚元基、七四人の名を云
す。特、川下の四喜、足神、防(防刻)嘉、ある者
之、窺基をいふ也。

人名を誤、誤、ある噴飯す。

尚、何、因し、扱、る、誤、り、の、四、羅、山、の、後、高、の、説、の、流、版
本、又、經、卷、の、名、を、左、の、訓、歌、を、施、し、り、云、

偶、見、大、梵、王、問、佛、決、疑、經、三、卷、一、云、
知、ら、ず、大、梵、王、問、佛、決、疑、經、一、經、の、名、を、了、る、こ
と、を

或、ハ、明、宋、應、星、天、工、開、物、と、訓、す、る、こ、の、也、
天、工、開、物、の、書、名、を、了、る、こ、を、知、ら、ず、と、坐、す、
注



楊、訪、古、志、の、書、史、に、名、の、著、い、ん、り、る、者、を、
撰、二、經、籍、一、訪、古、志、と、刻、し、ん、も、あ、る、
枚、舉、に、皇、
○外、四、の、べ、一、ハ、カ、ワ、タ、一、に、致、味、を、感、し、
よ、の、を、免、の、
黄、銅、の、よ、の、を、略、す

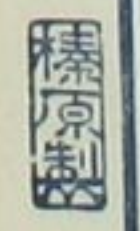
一、ハ、上、頭、に、那、那、の、像、を、

一、ハ、上、頭、と、猫、の、致、を、
此、合、目、重、重、雨、
お、の、の、刺、字、を、
チ、エ、ツ、レ、ヤ、カ、
来、る、と、刻、す

此、に、一、種、の、風、歌、を、
家、花、者、四、五、の、カ、ワ、タ、一、を、

獨りて金屋のしもの一外四人物を刻したる
 木札のしもの一丈の首を画したる木札を
 のしもの二、象牙札を二、木札西洋婦人、日本操
 各圖のしものを花集と漁りおのしもの各入局
 ありて交易と三、まゝ入局、
 六月十二日記
 〇早大岡古館員大石記、山館の古鈔本玉篇
 日の考証を心り本の稿をを意らし来り、此の
 考証に於て余自ら心んと心掛き、終に
 果てりしもの、今其の成るを告げ、互に、
 一、即ち勝字や一めせ、い、ぬめおく

昭和三年六月十二日



古写本玉篇残卷

玉篇ハ爾雅説文ト並ビテ支那字書ノ最モ古キ
 者ナリ梁ノ黃門侍郎兼太學博士顧野王大同年
 間ノ撰ニ係リ三十卷ヨリ成ル本館ノ所藏ハ第
 九ノ残卷ニシテ言部ニ起リ幸部ニ訖ル中間冊
 ヲリ欠ニ至ルノ五部ハ之ヲ缺ケドモ而レドモ
 全ハ所ニ十又三部ニ互レリ紙本墨書卷子本高
 サ八寸八分總長五丈四尺二寸五分
 本卷ガ世ノ注意ヲ惹キタルハ極メテ近キ世ノ
 事ニシテ其一時^(京)兆ナル一市人ノ手ニ在リシ時

ナリ其頃ハ仿寫スル者モ出デ一味同好ノ聞ニ
展轉傳摹セラレシガ本卷ノ筆者ノ國籍製作ノ
年代ニ関シテハ或ハ唯紙背ノ寫經ノ年記ヨリ
推シテ其古寫ナル可キヲ云ヒ或漢然千年以上
ノ物ナリト云フニ過ギズ大正四年雪堂羅振玉
氏蘭齋小川氏ヲ以テ爲シ此卷ヲ假ル氏卷ヲ展
ベ數行ナラスニテ己ニ其書法ノ勁妙ナルニ驚
キ審定シテ初唐人ノ筆ニ出ツト爲ス次イテ明
年此唐賢ノ妙迹千三百餘年前ノ原帙ヲ影印ニ
付シテ世ニ傳ヘタリ

本卷ノ紙背ニ佛典金剛界私記ヲ書寫シ末ニ識
語一行アリ曰フ治安元年八月廿八日石泉御
本寫之已了ト石泉ハ台密九流ノ一ナリ更ニ此
識語ヨリ二寸針隔テ下部ニ康平六年七月
於平等院 奉受此經 行佛子快算 行ト細書セル
一跋アリ是レハ快算ナル者ガ治安元年ヲ距ル
コト四十三年後ニ右私記ヲ傳ヘタルヲ謂フモ
ノニシテ平等院トハ蓋宇治ノ平等院ヲ指スナ
ラハ因リテ想フニ本卷ハ佗ノ此種圖籍ノ傳來
ニ見ルガ如クニ當初入唐留學ノ僧徒ニ由リテ

將來セラレ平城若シクハ平安ノ寺院ニ藏セラ
レシガ已上ノニ跋ニ據リテ中昔ノ比ハ京洛台
門ノ寺院ニ在リシコトヲ確ムルヲ得ベシ後其
背面ノ佛典ノ故ヲ以テ相應ニ獲得セラレシガ
降りテ江戸末世ノ比ニハ流轉シテ洛中ノ一書
肆ノ午ニ落ケタリ伊澤蘭軒ノ長崎紀行ニハ文
化三年六月六日ニ京都ノ書肆錢屋惣四郎方ニ
於テ彼ノ古物數種ト共ニ此卷ヲ觀タル事ヲ記
セリ此卷ノ中間六十八行ヲ裁割取セシ事ハ何
ノ時ニ起レルカ紙背ノ佛典モ亦同じク此災厄

ニ違ヘリ蘭軒ハ此變ニ就キテ記スル所無し蘭
軒ハ其日京ニ入りテ又去テ少間ヲ利用シテ展
觀シタルニ過ギザレバ觀ル所亦自ラ詳ナル能
ハザル可シ此變蘭軒記スル無キノ一事ヲ以テ
當年ノ狀ヲ断ズルヲ得ズ澀江拙齋森松園ノ經
籍訪古志石山寺藏玉篇零本ノ條ニ云ク又高山
寺東大寺崇蘭館及佐々木宗四郎家ニ按ズルニ
佐々木ハ錢屋ノ姓ナリ宗四郎ハ或ハ惣四郎ノ
嗣カ一並藏殘本今鈔録為三冊一為言部第九十
一至幸部第一百十七中間有缺此一冊即第九卷

一梅ズルニ此第一冊ノ原ノ所ハ登時ノ佐々木
本現今ノ本館所藏本ナリ而シテ其中間ノ闕文
ハ崇蘭館之ヲ藏ス一為卷十八之後分放部穿
二百七十一至方部二百八十四凡十四部此為一
冊一梅ズルニ此冊ハ後ノ第三冊ノ大部分ト俱
ニ其原ノ所ハ東大寺本ナリ一為水部冷字至
洗字中有紙質損壞處此為一冊即第十九卷ト後
柏木探古ガ黎菴齋ニ供シタル仿寫本モ亦中間
有缺者ナリ此變ニ就キテ今去ヒ得ル所ハ唯是
ノ如キ耳サテ明治維新前後ニ至リテ本卷ハ秋

楊子書

月藩ノ文學礪信藏ト云フ人ノ有トナリ又此人
ハ藤森天山ノ門人ナリ此卷ヲ獲テ愛重秘藏至
ラザル莫ク明治六年秋日暮動ニ突聯スル所ア
リテ自裁シタル際ニ特ニ遺命セシ程ナリヤ後
兒孫父祖ノ同門甕江川田氏ニ保管ヲ託ス柏木
探古ガ此卷ヲ奉ゲ可措今不知所在ト云ヒタル
ハ幾ト此程ノ事ナラハ青山田中伯一日甕江宅
ニ於テ此卷ヲ緘キ垂誕禁ヤ不爾來所有主ニ交
渉スル事多年終ニ明治三十九年伯ニ歸ス伯之
ヲ私スルヲ辱トセズ之ヲ學徒ノ資料トシテ廣

夕永ク學界ヲ益セリノ盛意アリ大正三年十一
 日奮然割愛之ヲ天延古文書十五通ト與ニ奉ゲ
 テ我が大學圖書館ニ寄ス抑玉篇ハ顧氏ノ撰後
 幾ナラズレテ改削ヲ受ケ爾後増損相繼キ唐時
 孫強ノ上元本出ヅルニ追ヒテハ顧ノ原帙遂ニ
 亡佚ス幸ニ我國ニ於テ十餘年前ノ古鈔本若干
 ナ傳ヘ賴リテ以テ黃門本來ノ面目ヲ窺フヲ得
 ンノミ今ヤ伯此人間希有ノ秘笈ヲ贈リ斯學ノ
 研鑽ニ資ス何等ノ高懷何等ノ嘉惠ゾヤ

附録一

現存原本玉篇一覽表

卷	部	分量	紙背	所藏者	参考
第九	言五幸	二十三部	治安元年寫 金剛界私記	早大圖書館 丙辰雪堂影印	
	右中向 冊至尺	五部六十一行		福井宗嗣館 丁巳雪堂影印	
第十八 之後分	放五方	十四部		柏木探古 明治壬午探古影印 東京神宮寺藏	
第十九	水	冷字至捺字 二十一行		柏木探古	
同	水	漢字至漢字		東寺尊勝院 此院佛書部ノ圖書ハ近年 其庫ト與ニ正金院ノ内 ニ移サレ	
同	水	殘卷		大段藤田氏	此卷ハ前記水部ノ南者又ハ 其ノ一ノ關係アリテ別ニ殘卷 ト爲ス者非レバカレバ且ク 雪堂ニ據リテ撰シ
第廿二	山至山	十四部 完		皇太后神宮 福宜語圓帳 神宮文庫 芝木田神宮藏	明治丙申神宮圓帳摹刻

第廿四 魚

残字十三行

某寺

丁巳雪堂影印

第廿七 茶

卷首綴字
明惠上人
書畫

高山寺

國宗兩種の此部分後者ヲ
併せて明治癸未印刷局
影印の雪堂本併せて
丁巳影印

同 糸至索

經卷尾
七部
延長四年寫
石山寺

國宗兩種の近藤正有實
經卷影鈔不

右ノ内帙紙齋ハ第十九ノ残卷第廿四ノ残字以
外ノ數卷ヲ其光緒十年日本東京使署ニ於テ輯
刊レタル古逸叢書ニ收ル中ニ影照本ニ採リテ
莫ク失ハザル者ハ唯第十八卷ト第廿七卷初分
トアル耳然レドモ其校改レタル所ハ皆精確可
見ト云フ

崇蘭館本が中欵本ノ中欵其者十ニ事ハ燕齋採
古雪堂ノ諸家記レ得テ明白ナルが如レト雖然
レドモ其紙背ノ佛典ニ就キテモ亦言フ所アリ
タリシナラムニハ更ニ明白ヲ加ヘタリシナラ
ハ中欵本紙背ノ佛典金剛界私記ハ次四佛結鬘
印ノ後次振鈴ノ前ノ中間ヲ缺リ之ヲ異流異書
ナレドモ同類ノ書十ニ東密ノ聖教寛平法皇御
補ノ金剛界念誦次第ニ徴スルニ此間數十行ア
リ本書ノ有缺六十八行ニ合スル者アリト稱フ
可シ異日崇本ヲ訪ヒテ之ヲ檢セハ

高野山古抄本ニ糸部一卷アリテ明治十七年其
摹刻本出デタリ題シテ玉篇零本ト云フ高山寺
本ノ轉寫カ別ニ是レ一書ナルカ佗日見テ悉ス
可レ
採古書ヲ記シテ云フ石山本ト同種ノ者一卷或
人之ヲ藏ス然レドモ未其何部ヲ為スカヲ知ラ
ズト後神宮本出デ頃青魚部ノ數行出テ又水部
ノ殘卷アルユト云フ知ラス是等ト採古謂フ
所ノ一卷トノ關係如何ヲ

附録二

伊澤蘭軒長崎紀行文文化三年六月六日ノ條ニ曰

前略(余)は寺町御池下ニ町錢屋總四郎を訪ハ

鶴名春行主人家ニ在ル鷹對歎晤はなはた慙リ

古物數種を出シて觀シむ所藏ノ大般若第五十

三卷零本卷子ナリ神龜五年ノ古鈔跋文中ニ長

王ノ二字アリ又古鈔零本玉篇一本邊格上短下

長延喜式圖書ノ度ナリその裏を裝代セリ古鈔本ノ佛

經ナリ治安元年八月廿八以石泉御本寫之已了

康平六年七月 於平尊院 奉受此經 佛子

快筆とあり右件の年跡にて玉篇の古鈔知べし

云々

背面の佛經は玉篇の零本を料紙に写した
了中のなり卷子佛書の背に佛書あり中の背こ
れ也佛書の故紙を以て装束せしはあらず

(右鷗外全集伊澤蘭軒ヨリ)

椋齋ノ評真ニ然リ實物是ノ如シ我國古ク紙
ニ在シ成書ノ紙背ヲ利用シテ書ヲ作ル事比
々皆然リ且リ古鈔玉篇ヲ取リテ言ハバ高山

考本ニハ明惠上人ノ書畫アリ石山本ニハ如

意輪陀羅尼アルノ類ナリ尚石山本ノ如キハ

卷末ノ餘白サヘ利用セラシテ梵漢對譯ノ文

數行アルヲ見ル

惣四部ハ二代目錢屋ナリ文政二年八月歿ス

享年五十又古奇書秘籍ノ蒐集ヲ以テ著ハル

學殖アリ禮儀類典拾遺帝國圖書藏宗本鑒定雜記

椋齋ノ殊湖南批丁等ノ著書アリ

長崎紀行ハ蘭軒自筆本トシテ大本墨付三十

四枚ト云フ今富士川游代ニ歸ス



「今」を禮讃す

早大市島謙吉

字引をひねり回して、尤も力のある字は何かと案ずると、今といふ字を取り當てた。古來の哲人、能く百代の師たり萬世の範たる金言を遺したと云うても、恐らく今なる語以上に力強い語を案出したものは無からう。正に是れ七首肺腑を抉るの語である。人生唯だ今あるのみ。昨日は去れる今であり、明日は來らんとする今である。回顧と豫想は假設で我等にあるものは唯、今のみである。日月は移り天地は須臾も息まない、刻一刻推移して行く今こそ實に宇宙の本體である。今と云ふ瞬間程大切な時は無い。事の成るも敗るも今にある。間髪を容れざる今の一瞬時が一切を決する。此一瞬が活機である。之を捉へ得ざる者は長へに敗者である。此一瞬こそ誠に隨の底迄も振り起す力がある。既往は今の葬られた残骸であり、未來は今のまだ産れない陰影である。葬りたるを語るは、死の年を數ふるが如く、來年を語れば鬼も笑ふと云はれてゐる。既往は遂ふべくもなく、未來は期し難い。唯根強く迫り來るの力は今と云ふ一瞬にあるのだ。既往に美なるものありとするも、其は其利那の今に於て成れるものだ。更に再び其美を求めんと欲すれば、唯だ此瞬間、今を美ならしむるの外はない。之を未來に再成さざるも明日ありと云ふ如きは、天地不息の大道に背いて自から死滅を求むるものである。唯だ今現在の期すと云ふ如きは長へに之を失ふと言ふに同じい。時に未來なる別境地の在するのではない。唯だ今現在の期すの心あらば、速く空靈を其間に假定するの愚を止めて、何んぞ起つて今直ちに之をなさざる。期し難い假定に連れて未來を口にするは其優柔懦弱を自白するものである。一時は今なりと叫ぶの時、其處に果斷の決心があり、剛健の意氣があり、直截の邁進があり、奮闘の努力があり、其間一毫の惰容を許さない。斯くして功の成らざることはない。私は今を禮讃するものである。

講談代楽部七月號巻頭言

始めて

活字に觸れた感激

早大名譽理事 市島 春城

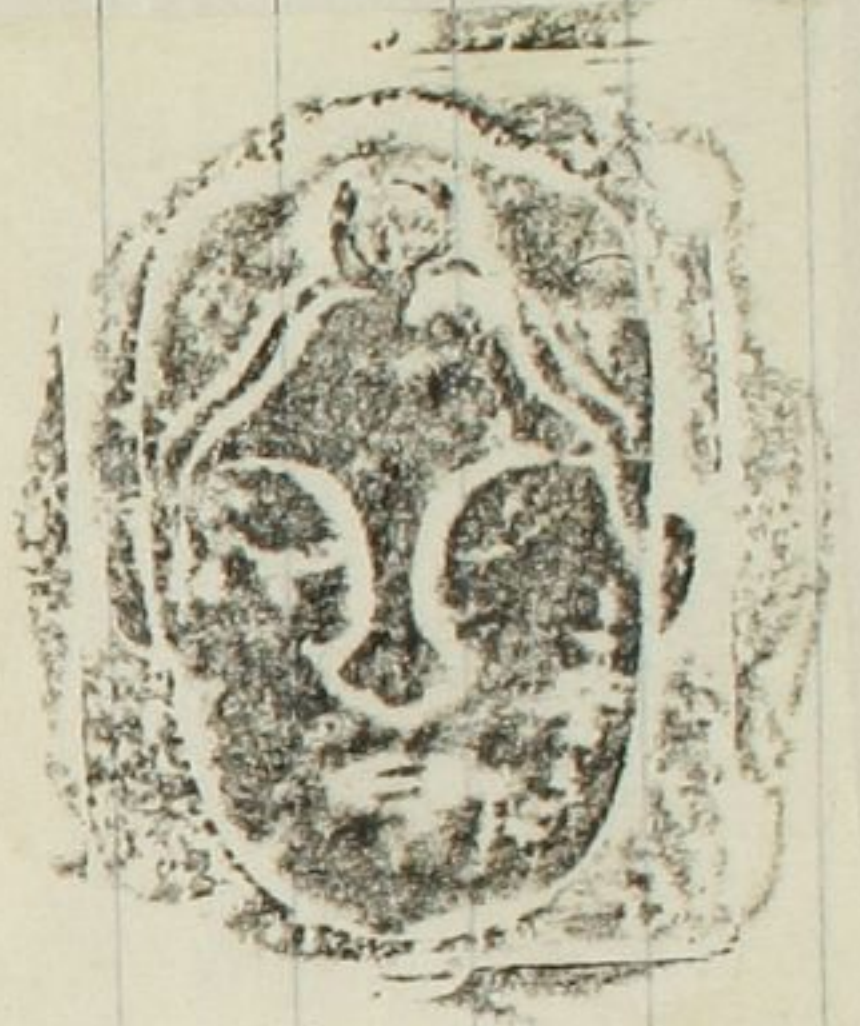
私の始めての體驗の一は活字に觸れたことである。私は四十餘年來、間斷なく活字に縁因があつて、到頭活版社の社長となり既に十年を経たが、多分始めて活字に觸れた時の感激が、私をして斯やうにしたのであらうと思ふと、是ほど深刻痛切のものはない。私が始めて活字に觸れたのは、明治の六七年度である。郷里新潟の英學校に入學中、上級のものは一週一度教師の指導の下に、西洋の新聞を翻譯することになつてゐた。そして長い記事は五六人が分譯し、それに教師が筆を加へて、新潟の新聞に掲載せしめた。當時の田舎新聞は勿論幼稚なもので、活版も印刷もお話しにたらんなど粗末なものでした。併し當時は活版が如何にも珍らしく、亦新聞も大層權威のあるものと思はれた。其の新聞に荷めにも自分の筆に成つたものが、印刷され

て幾百の人の覽に入ることが、幼な心に如何に嬉しかつたであらうか。當時の幼稚な感想を有體に云へば、之れを榮とし之れを誇りとしたのである。

私は活字に觸れたと申したが、嚴格に云ふと、間接に觸れたに過ぎなかつたのである。實際活字を手にしたのは、それから十數年の後で、讀賣新聞の編輯を主宰した時である。當時編輯主任の任務の一は、編輯を了つて工場に臨み、各級の記事の活字に組んだのを、指圖して鐵版に裝置せしめ、或は自から裝置をした。これが活字に觸れた抑々の始めである。併し活字に興味を有つたのは早く學生時代の十三四歳の頃にあつて、その際の感激が私を驅つて新聞記者たらんとする志望を起さしめたり、出版事業に興味を感ぜしめたりして、記者生活も十數年やり、出版事業は三十數年に互り間斷なく續けて今日に至つてゐる。ですから私の一生は殆んど活字で終始してゐると云ふことが出来るのである。そして其本は幼年時代の兒戯に類する發端から導かれてゐることを思ふと、始めての體驗とそれに伴

ふ感激ほど大切のものはありません。

惟采 七月號 所載



表

きんとう示るる墨土蓋

銀土蓋の墨土蓋の

蓋は紙片の彫刻

ありしを以て入す

頃の時代あり或

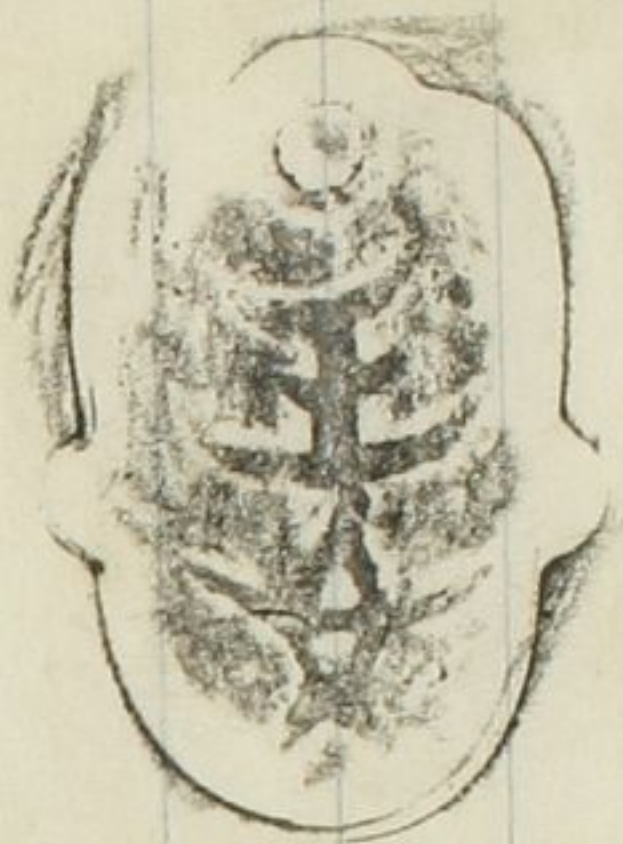
はよく支那の古貨

也と余未だ其の可

否を知らず且ち

其の拓をとと

とす



裏

柄がついてありて、
つとてあるは日本

墨土蓋

物也

○貞治の五十餘載の印を存する、
未だ定説なき。未だ定説なき。未だ定説なき。
未だ定説なき。未だ定説なき。未だ定説なき。

安政四年五月肥後菊池郡隈府所
山正祝禱寺の菊池能運朝臣の墳墓
を修復し、時、一個の印が現れ、
ハ考るるの印とあり。菊池能運云々
正元年に没してあるから足利時代
あり

るが鈕が古雅である所から日本出来て百のやうな
氣味がある。或る人は比須大星を他日本人の長
弁鈕の形式があるから日本出来たと云つてあるけ
れども考証がある。支那から渡つたとするの支那を
いくらかありと云ふものもあるが、支那の純銅
の鈕としてあるの。朝鮮のもの。日本もの歸る處
く流布してある。秀吉を以て用ゐる所を見
ると鈕符を取り上げたとの思へると云ふ説も
ある。

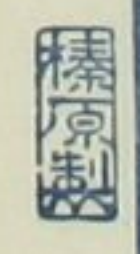
此印の滋味を感じて昔から蒐集すれば人或
人があつた。安永天の頃の人の安子深か二十五個
金形道人無從源河が五十顆二日坊が五十顆集

あれ云々である。又近世の益田三洲が五十顆銀
柳湾五十顆大坂の平瀬が百顆を少くしてある。
此の二印の三村清三郎の書いといふものも
大坂を著きとす。六月廿二。

○はゆに念書事業演劇協賛建設の収入
も回りのりん廿三日と五日の間、大隈海軍
に津正が別と譲らるる。場名柄大隈
夫侯と題とする。脚本を必安とし
る。中村吉村の手で脚本を著ぐこと
も、昨日脱稿した。今日河井安彦
長谷川天淳も同好し青山大隈侯

侯と協約を其前に脚本を朗讀して認許を得り。

四幕とのう七才一とわ三と條約改正の中四の井伊直弼銅急除幕の節大隈伯演説の坊也條約改正の初幕の伊藤里田伯降伯を早稲田の邸に訪ふを伯を説き外相の椅子につき條約改正の衝と苛らしめんとする一節、中二の伯外相とろろ、英公使に改訂を説かざる所を如き、四論演説し、島と海江田伯の保守派伯を辭職を勧告し伯の屈せざる所、中三爆弾の騒ぎ也。



大体中實の八十五年史と據り、中一才三由合りし中二英國公使との協判のしく英條約を改し人をめしを信まし、余もも英公使の及前論を省略すしと注意す、中四の除幕式に柱ける伯の演説を主眼とせり。

六月十四日記

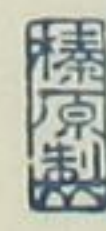
此を後、約五十分を費す、草紙の心より七上出来也。○昨の午後、洋更を成辰會演説の物の邊に、没類す、也身各や成辰と因め、演説を催すもの一二と是を演説、中一動心を極く演説をるるとし、物を選擇に苦心す。

女衣を長格 門附け二美人 若衆えりり
 田宮七又程丹の美人 大夫と志見
 夜芝居記をのれ 牧笛美人の供
 巾着の供女 橋上橋端立の美人
 櫛を物置り

以上みりり

春草の八十中八九階役者伶子と演劇の春草
 として大味をいへりり

春草の逸者も今り出づ秋浦家より出海
 せんり四十二枚肉筆の題も逸者もや
 や細き木切の密画さう、惜らう一月と強生
 の二枚を測く、強生の一枚他人の筆いへり



いたのめと名画風画しからぬ、全三巻
 一巻にのみあり、後欽也あつる春草の傑
 作といへり、多時佇立細装飾のくこ
 とを知らせりませ。

秋浦家も同じく今り出づ、他の一枚あ
 り、其も寛永の頃をいへり、ゆめおの園
 七全屏風の題も、身大の婦人を描きたる
 り、これらの大画他に、身大の婦人の、破装
 持物、尺の春草とあつる、是のこのさう
 細長い細装飾をいへり、侍とあつる、
 紙に敷きたる、墨スシカハ文を系、
 帯の極細の、細く、紅色のシツク、深を着

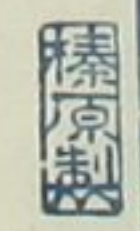
又
三
解し難きものあり
三
法を弄する者あり、双六盤もあり、目元を一領位
のゆり位に揚げる者あり、仔細の研定を
得る所多かるべし、種子候より細視を
せりしは遺傳なり。

名相を指し濁りしと撰りしこと
し、唯れ此のゆりも美人の侍羅深ひ引
天地を驚かす

○此の上をよむゆりも、主客の及ぶを
りゆ初年一の荒干をゆ

明次六年一月あり

四十一字あり



一枚摺りしとて優れ敷に
前略の優名新と似たり
ん名体裁用しかる所也
初とて見

の法成辰

依合満及甲法用の記 一冊

白二年

金泥書并合書 一枚

の三年

依合満并合書 一枚

聖上二紙の書并合書の形式
を兄の二助なり

丸政陰徳太平記新編

長州徳成の園と号しききりえん

と未だ評かゝ判する能はず

以上は底本の註列に由れりとのるるを
考ふ。

外に版本一枚摺荒干を得其の四五を採す

一新版新編の八分八分双六 籠形 一枚

一契持新雜所 一枚

一新版新編後所書年代記 凡刺磨 一枚

一詳判武家地商人 一枚

一日二二合 一枚



一版改訂 新編年代記 一枚

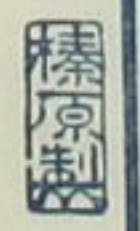
一高見時花三幅形 嘉永三年 一枚

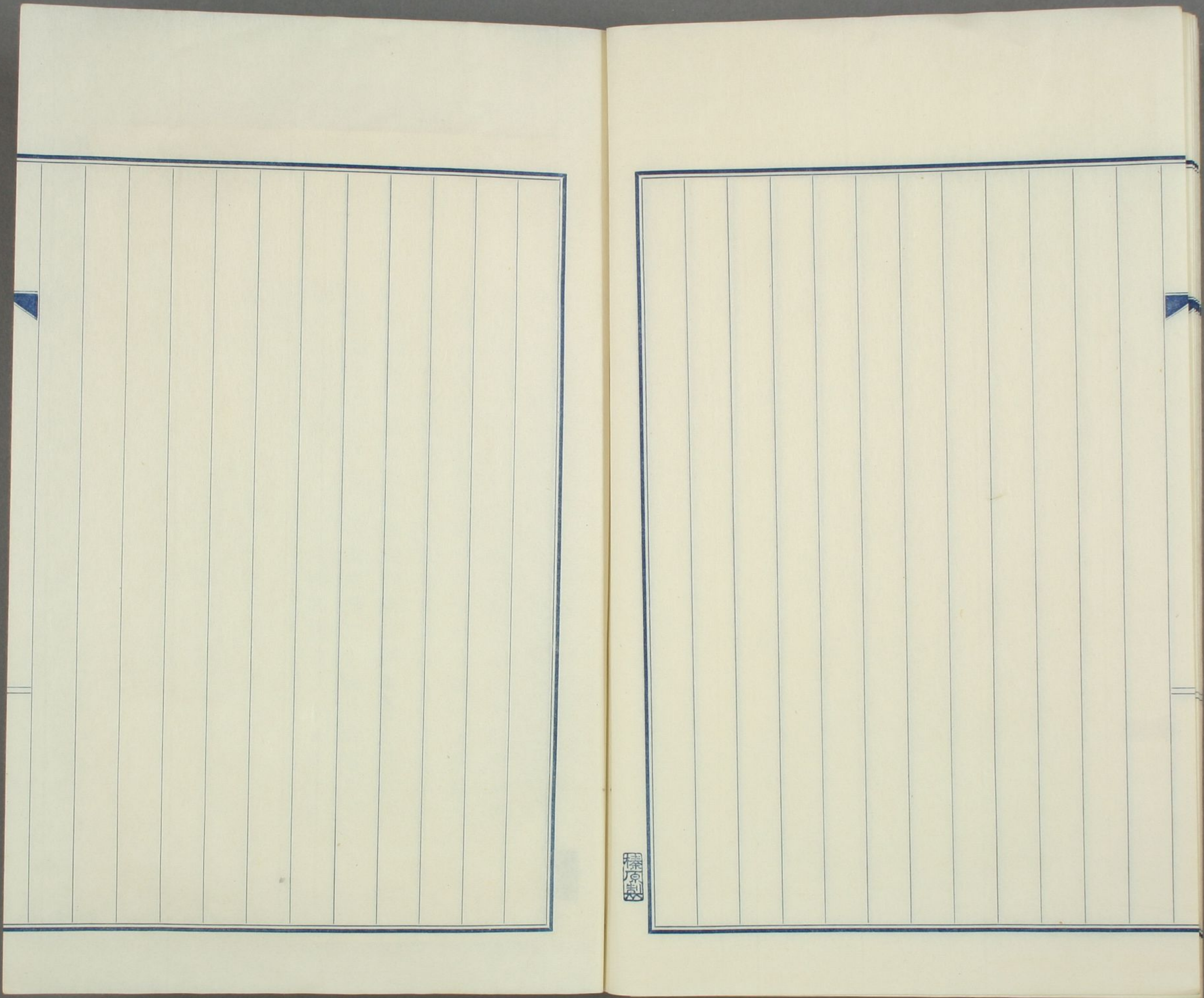
一産業一巻 明治廿六年刊 九枚

以上 丸三横山内伝 六頁上分記

○此改訂よりハハカクタイと通ふ此の意は作の
執味のハハカクタイと通ふ此の意は作の
リセまくの意に違ふ。文房具として机案を併り
珠、外心味を口具する此の興味あり、此の又二
三巻を好む。獨乙のヘンケン米名の改こ一を花と
も更々形式の異なるものも、ヘンケン此の世
に起るす又物を心するを以て是等のもの、

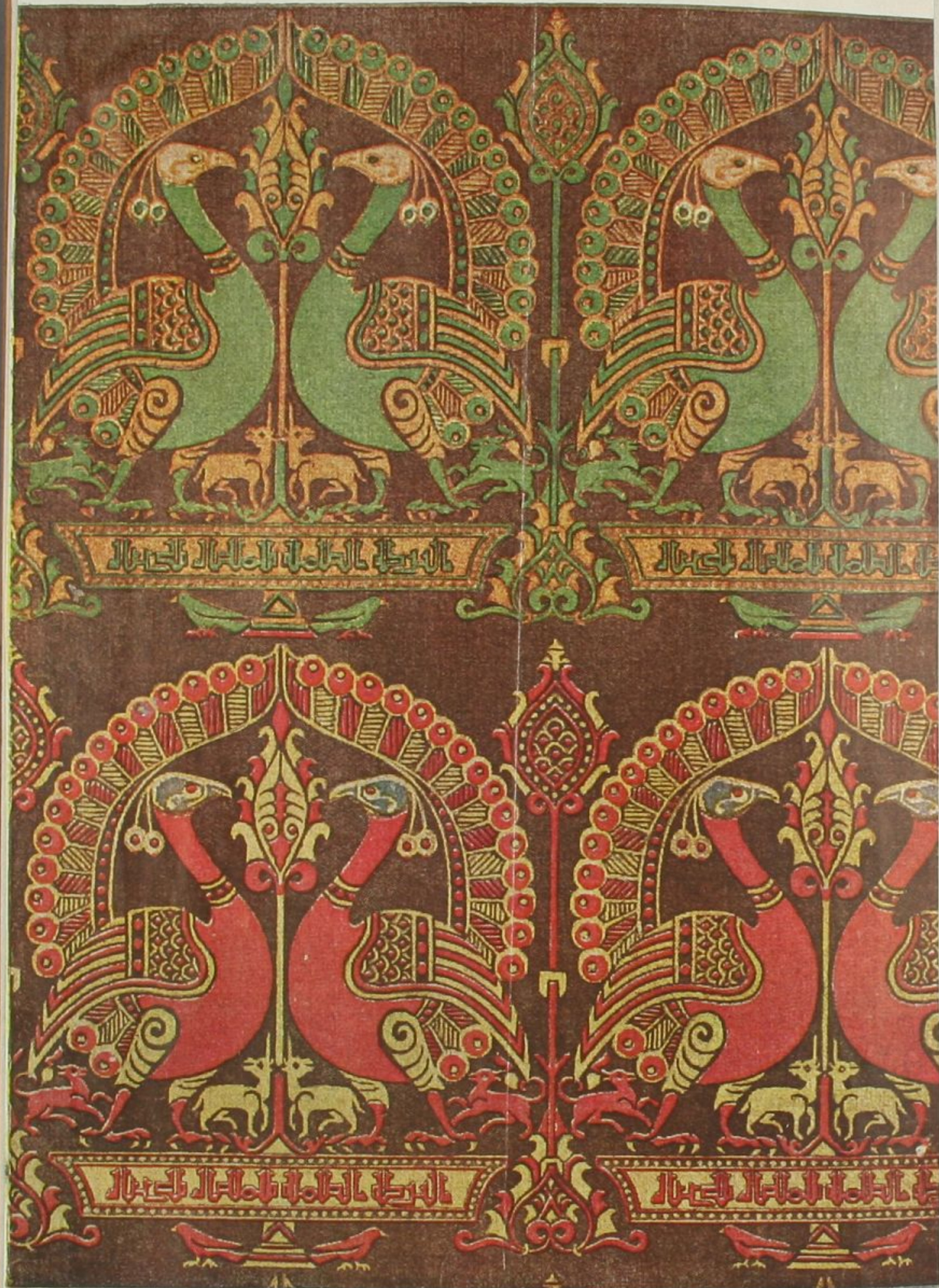
ラの紙切り本日本様造りたるものなりしからん。この
ブラ大和むすも一種の故あり。木彫埴人の像、形
名を施し、その模造りも、外四角とぬき
りし亦花の中、かくて可なり。支那物との
家花物改りあり。俗七竅ありて、花中の時代あり。
家花別々支那物志の長と二尺五寸許の世の唐紙
切あり、山あ楊洞を細刻し、喰ひぬらる大
のいなり、**田舎**に保蔵す可なり。 (六月十日の誌)





紅印

以下
5丁
白紙



孔雀紋様 佛國ツールズ寺院 西曆十二世紀中頃

正價 150
東京

閑室

深原製

